竹取翁物語

首

竹取翁物語解序

飛騨國高山里田中大秀ち。大平のまろひの兄弟那ヒ。その学のちくれ。其のいとりちふの紀。此解説を見てもしるヒぬ角し。鈴屋のをしへみちみれ。

れ。あらのはらのあらかして。白玉ち五百津彩ヒ。ひかりへをあへぬちゆ中ま。多満ちはふ皇神の道ふ。まれ言霊ちはふ言の葉の道ふまれ。おもれ〳〵。ろろとき紙おらして。八百ち人ち杉本ある中ふ。

よゝのきこゝめて。人をもはやゝし。後の世をもをゝ
おのむを功なてゝしたゝ何のゝしゝれのゝしを思ひもる
ゝ京雖彼伊勢尾張は四國ゝ十五ゝ人。三河遠
淡海伊豆甲斐ゝ駿ゝ邪志義濃斐ゝ六國ゝ七人。
出雲石見安藝吉備豊國肥の國筑紫ゝ七國ゝ七
人。もへて三十人ゝもゝ人なゝとゝのりけるかゝのを
ゝ名ゝ中ゝ一人よゝ思ゝ。ゝ曰はゝ兄弟
ゝ形とゝのゝ。はゝのはゝめゝ名ゝ人ゝ。享和

元年四月のはゝめ。此人ゝ人ゝのもゝ伊勢ゝ来て。
ゝ屋大人ゝ学ゝ学のゝ。いゝを求きゝゝ。教子
の貧ゝ。ゝゝ。ゝゝひてこそまゝまつれ。ゝゝ
きゝゝ。ゆゝのゝかゝゝ。ゝゝのゝしゝ。ゝてまゝ
てゝよゝこゝひゝき。ゝひゝといゝるゝ。ゝてのゝさし
ゝまめゝるゝまゝゝもきゝゝきゝめてゝゝやゝのゝゝ。ゝ
ゝ。京ゝゝ。ゝのゝゝかゝゝゝ申ゝ。文ゝゝて
おゝて。ゝれ京ゝ四條のやゝとゝ。安田植松ゝ。ゝ

はあれふかきこゝろあつてさ〻出給ひ。此二人形を
よくはこゝろえむとをもへやりけるおのれを三月ばか
こゝろよりはじめる事にはあらで。翁ふかひてをえのほうさ
ほけれをかゝこゝろあて学ばさの盛なりしさまも。文のあよりも
ふきゝてをたりけるそのうせちを日毎ふよるひる
学二度ふて。京のみやひをゝちをはゝめて。のちは
にのひゝる國〻の人〻又きゝつゝへてふわもへふてあふ
のほり来るをゝへ子又雲の上人さへ此やゝ是ふ

にのまゝ所〻ゝもおひへおはゝまして。きのせ給ひき。
よゝみやゝきゝゝるゝ。萬葉集。源氏のものがたり。古語拾遺。
延喜式の祝詞の巻。詠歌大概。玉匣別巻なゝ
ゝりけり。こゝふ國〻よりのぼりつゝへるも。京ま
をゝへゝをもよるひるもおこゝゝたしをにのめ給。
そのゆふ。一はもおちたなをにふ百ゝ。さ海
なりしをにのりつゝこのや。此ちひてちひふ一百ひ
をかゝることなくいそゝこつゝめりゝる。ゝ海ゝ

人のあるやう翁を深めゝられるよりほとんて後。始の
ついてふ。梦松有伝らおのれふかゝりたることをいり
ゝり。四月廿日雙林寺の會ふをいてゝまけの獄閑居
郭公さゝり顕山家水なくとよみ。五月廿五日の會の
二題。加茂川納涼嵯峨山松なくとよみ出られる
こゝ。都日記とゝふ書ふ見えられゝ。抜の深やゝ
名を田中紀文ゝいられゝ。此人の事をふをもゝ
人をゝゝいられゝ。此はゝふこの抜いてふかゝつふれり

けり。翁なゝれゝられて後。文化元年八月より十月
まて。松坂ふ事なて。大ひらの家ふて。新屋ゝ教の
書ゝをゝゝはくかきうつゝなとせられ。まふ
おのれこの紀の國ふうつり来ることふをも
ゝふゝひ来て。三ヶ四曽旅屋せられしこゝをも
ゝりきゝゝゝゝこの学のゝゝかふあゝふかゝら
ひふはゝけるふ中ふ道ふ志ふ記こゝゝゝ。
抜の國の惣社考とゝふ我あゝはゝ。その國の

御社の地を名づけ。その里ちなむ荏名神社
のいにしへおはしますをかしこき。わが
をしへさとされのれるかしこはありて。御所加
茂あてなるかもへて神代いつにまつる色紙由
恵よりなる人とかきやしきのせ。又神代正語ふ
つにて。帝紀正訓とふをもいにしえさちやく思ひ
名ち。土佐日記。蔦くの原。此竹取なくの解の所発まし
ちかをもおのれよかつりたるかりたる。そそ飛騨

ちなくみの屋ぢを建むのんあまへ。にちあし
先はの所あ所くとにあるけれ。歌よみ文あ
き琴和琴笛ふ記みやわきふんよりて。
ろ名あ記。高山ち里の名をるく。ちの所ふ
た。京よりちるあふ遠記所なれて。田舎ふ。国中
ちふあよひ。世ふひいく。まれひのちなる
いはをるた。此ちなをみをるれるよあ
を思ひいをきれける。世ゆふよかいとく

けてこれをはゝふみやゝ。

文政十一年戊子十一月朔日

本居大平

竹取翁物語解卷首

飛騨高山　田中大秀　著

竹取翁の物語ハ諸の物語より出來たゝ元の祖ゝ也いとゝ殊に古ゝ也で記を古更など引出さゝれたゝしふる註釋などゝ形くて年經ゝる沈契沖阿闍梨の河社ゝらも書は天竺をもつとしより古更どもさまざまは引出らるゝを始めゝ其後難波の小山儀と云人段ゝを分ゝこゝはやゝのに解ふる抄と云なむ有ける。抑こゝ物語よゝで一ゝ深き心も不入で讀見ゝハ甚安ゝ心の行ゝ聞もるやゝ形るを文義など委しゝ心得ゝて幾度もかゝゝと讀味ゝて為ばゝ中ゝまいのゝでゝ

ゆる隈〻多く出來て惑ひうたがはしくなるもの成ゆくめるさてふい此書もとよ
り詞をいと〻省略るさはなる事〻寫本に間に脱ることゝ誤まる
處もゝ世くを經るほゝに數ゝかりぬれば〻なるべし。かゝて先つゝし小
山の抄よりみのゝいさゝゝ思よりる更ゝもかつく書加へ置ゝりしをい
ゝし年に秋越中國富山人佐脇大彦主訪來らるるに彼抄見をよゝ
ゝ猶ゝ其猶〻そ〻ゝう〻て見をてよりどゝそ〻ゝにつふみ又其のち
訪來ゝる江戸人巨勢健冬ゝる板本なゝのゝ世に異なる一卷を持來く其
よみこのゝ〻互ゝ言ひ意ひのげつ〻ひなどゝつゝる〻條く辨得ゝるを猶
世に弘く傳へゝ〻此物語ゝみ見ゝ人に示さよゝ〻て一ゝゝ書
ゝる〻〻ハ文化の九年と云し秋ゝ〻其翌年の春に便に本居翁の許に

紀伊國にも遣ゝて見をほゝゝせ又ゝゝ尾張國などゝに物しける時
そこに秦翁鈴木翁にも思ひし寄ゝゝむ更書加へ賜ゝて見をよゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ何〻ゝと世のゝゝをゝて得〻ゝも書ゝ〻ゝゝゝを吾
徒長瀬俊香孫もこゝろに催ゝゝゝ役ひ〻此秋の末より思起て猶ゝ
考正してかゝハ物しつるになゝ

文政九年十一月

◎ 物語ぶとゝゝむ意ゝ

凡ゝに物語書よゝこゝ伝ゝゝを吾師本居鈴屋大人に源氏物語の
玉の小櫛といふ書に甚委〻〻云ひ〻り此ハ物語ぶと見ゝと思ゝゝ人
ハ必不讀でハえあるゝじけゝバ今ゝ其片端を取〻此に記〻つ。諸の物

語のさまは各〻少づつかきもてくさるべくなれども何事も昔の世より有し事を談る由もなく或ハ聊のふら有し事を據りとして作のなくもかき或ハ其名をかくしもし替もしかきも或ハ皆ごとく作もし又稀なるハ有しこをを其侭を書るも有なくやうなれる中に先多くハ作ふるもなりとて其を何なる趣なる物なりて何の爲なる讀物ぞと云う大方物語を世中に有とかの善き事、惡き事、珍き事、可笑き事、面白き事、哀なる事、なごりさまざまを書かのなはしなく其狀を繪るもかきまぎれなどして徒然なるほぐさの慰めもし世中に有やうをも心得なく物の哀も知物なりかなくて何の物語も男女なりのなひの事ハ宗と多く書ふるを代くに歌集どもなりも戀の歌ハ多きと同し理なりを人情の深く係る事恋ハ勝るハ那ら事なりとなひ

又巻二物の哀と云事を委〻〻云示さ彼物語の殊ハかのさ筋を論ひなく凡物語と物の哀知べき便なるよしを喩さ筋ふるを思べし。此物語ハ其定なく赫映姫の容貌ハ世なくをぐるを見くハこうちあしよ若〻もを忘ま腹立しさるも慰さむて形のよきハ甚く感筋でなり又世界の男子貴ふるも賤も戀慕ける中ハ疎う心浅き人を益なる歩行ハを無うけをとて遂ハ不來なをぬるを猶いと深く感感えしも思不止此女不得でハ世ハ可在のくと思なり那ふ五人の人くハ身をいるばくに那しるハ大方ハ世の男ハ切なる念の狀を書顯をし物の哀を令知ふるもハなるをさるなる赫映姫ハ甚はまなく哀とをぬ狀ハふるよふるハ彼蓬原處女、鬘子、櫻子、なごハふるなる五人の人くハ身を分方も

なく靡くばかりもなく見えたまふなどの如くにて見えたまふ帝の御前
にハ然しも情なのべて草木につきて文を通はし今ハとて天の羽衣着
時なも文を獻ずべきやうもなく煩ひたる身なる由をつぶつぶと奏するも
げに心なしとにハあらぬ由をつくるになるべきなるべしバ此物語も
物は哀知べきことをたひなるべしバ其意もて讀味べき書なるべきなり

◎ 書は名

此物語の名具にハ多けれども物語と云ばく省くハ竹取の物
かたりと云も難なし此翁をさして竹取とのと云こと主水帯刀な
ど云同格なり此物語の中なるかたりとはもいひ大和物語なも竹
取のよ〳〵と泣つ〳〵云〳〵と歌なもあり扨て多計登理と云ばきの又多迦

登理と呼べきとのと云論あり六百番歌合の俊成卿は判に云く竹取翁の
更なるかけハ両様なるべし然而此翁はとりてかたりと云と
いふ證據ぞ有べき云〳〵顯昭陳狀にいはく万葉集竹取翁の更なるかた
けやり両説なり万葉なも両点なべしと堀河院百首懐舊の題に中納言師
時卿の歌に春岡に登て見れば菫摘むとの〳〵子等ら更をしぞ思
もふとよまれて侍るバ堀河院の御前にて講ぜ彼人かたりとよ
まれて別の難も聞き侍るべ絲バ其説に附て詠ぜるよし申しかけとり
ハ詞ぞとのりまく彼卿の歌なども證拠も聞えず又論敵もえ出され絲ぞ
如只今ハ勝鞭をさし侍るべしかけとりとよまれて人まことに證拠
も尋まくさはゆ侍るべ云〳〵と侍るを抄の頭書に引き昌憙今按に日本

紀ニ其所棄竹ヲ終成竹林故号彼地曰竹屋云。又遂登長屋之竹島ともヽ又竹葉瀬人名豊等を思へば竹何と云ばまもなく多迦と云るこの古の正訓なるべし譬へば酒も下ニあるハ一夜酒といひ上ニ置るハ酒槽酒蟻と云ごの如し仙覺万葉抄ニもタカトリと點をりもくゝと此物語も彼万葉ち翁の名より出るかと見まそバ古風を存して多迦登理と喚べくこそと云ひ大秀按ニ爲るもくゝもなけくもやも云べくゝ聞まる中ニ多計登理と喚べ宜ニるべき先此類ハ言第四音を第一音ニ轉して下にけぐくゝ格竹菅金舟稲風雨酒目天食などるもくゝるやるしまるもるもるし

なるるもるこうすがたくゝすがたくかな山いな穂ふな屋形かぢ祭ものまちぶとさこのばきまこのくやくなど竹のもくゝすげの緒云と皆中間ニ之字ある

意なり取ハもひくゝりかもくゝりの類又るもちもきぬこのもり社佩守ニ同じ豊等ハ中間ニ之字ある也ばまくゝあくゝ又今世の言なるくゝ金掘人をかゝほり稲苅人をいひこのとと云など業を名くゝるる皆第一音ニ不轉を以思へば多迦登理くゝと云ばこのくゝ又天ハ何ものあ某何ものあ某何ものあ某何ものあ某といひ食ハ豊受姫ぬとよをこの姫宇賀の魂なけもちの神と種くゝも云。又高津宮ニ御宇天皇の御製くゝハやもあ、一本菅ハ子もくゝ、立ハ何をなぬあるくゝ須賀波良くくをくくを須宜波良といもめ、何くゝ須賀志賣と一首の内ニ言を交て須賀くゝも須宜くゝも製ものと。契冲阿闍梨の云くゝ竹取と名付るハ万葉十六ニ昔有老翁號曰竹取翁也云。この竹取ハるるくゝりぬと訓を昔ハるるくゝと訓るるこのくゝ豊を本くゝて名附るくゝし顕昭六

百番歌合の時今は名のみとなりとよりて名ゐるを判者咎ら給ふ
ものなれど大和物語より名のみなりの云々成の校本ハ名げなりと有り
何ぞハ通ずしても苦しの〳〵ぬるやと云給ひきさ給で強ひ拘るばき更
なり非ざめ給を今ハ云則ゐるより從〳〵多計登理と喚べ〳〵定つ。そもそも〳〵
落四物語、源氏物語、など宗〳〵て談ずる人ゐ名もて附給ひ是も蓬生
巻ゐ見えたる如くかぐや姫の物語とて名付べけまと思ふを繪合巻
〳〵ハ竹取翁〳〵しも云給ひでハやゝより翁の方を名ゐハ負ひんこのし

◎ 古く給る時代

師玉の小櫛云〳〵竹取物語ハ誰ぞの何時の代ゐ作まりしふさぶのに知ら給ひ
ども〳〵ゆ〳〵古き物ゐもて〳〵延喜よりハ以來の物ゐそ〳〵ゐると云

給ふりき給ど源氏物語ゐ繪ハ巨勢相覽書ハ紀貫之かにまと云ひ給で
延喜の以往より在し物なるべし元來作物語なる給ハ拘ゐる法ゐ更〳〵ハ
あ〳〵ざめ給ど彼物語ハ作主紫式部の〳〵め〳〵心ゐ〳〵ひせ〳〵給ふる物なる給
で徒然艸ゐ〳〵ふ小野道風朝臣ゐ書る朗詠集のゐ〳〵ひ〳〵ハ非で古く
より賞翫く時代も似つのハしけどハ〳〵て相覽主貫之主、など物ゐ〳〵
給つるゐ〳〵ゐ云給ひ〳〵ゐ擦〳〵て作まりと見ゆる寶樓閣經ゐ高野大師
の將來まり是ハ不空三藏の譯の方なるべし と云ハ大同の比より後なるばきハ更なり
昌憲の抄の頭書云く松浦物語の奥書ゐ貞觀三年四月十八日云くと有り然て
紫式部物語の出來ゐ〳〵め給ひ給やなる竹取と云ひゐ給ハ猶貞觀の比
よりも古き物ゐ〳〵るべし と云ひ。時代大氐ゐ〳〵ゐ〳〵なゞ〳〵此奥書ハ不

審〳〵信ぜざるべからず思ひもよらず

◎ 作ぬし

此物語ゐなどゝ云事なるべし凡〳〵古き物語書ども作者は
なしなるハなし。河海抄ハ竹取翁ハ古き物語なり作者不知と有るを
此抄ハ古人の傳説ハ源順主ハ所作と云事なれどさぶのなべて此
書の唐土天竺よりもて博聞強記なるべいなべくら造得べきと思ふ
るなれど若ハ順主なるもあるべきのと云人なども在けるを聞僻め〳〵次ハは
順主の作なるなりと云臆し猥言なれど有べき。宇都保物語を河海抄ハ源
順作なれと有疑と記されたるなれども猶此物語も宇都保も順主なるべ
よしハ落凹をも此主の作なりと云ハ就〳〵落凹物語解ハ論みきハ皆區

區ハ文躰異なれど同人ハ所為なるべ〳〵ぬい論をまるべ〳〵ても明らかのハ分
るるべき事なれど昌憙ハ云〳〵河海抄ハ巨勢相覽一説云巨勢金岡相覽同人
也云〳〵但如高名録者相覽猶先代人也金岡仁明天皇御時人也承和四年九
月五日圖御所繪と云て。花鳥餘情に巨勢相覽者金岡之子云〳〵金岡寛平時
人為其子則可為貫之同時人と有り大秀云相覽主の事何ぞ為ぞ
なるべし承和四丁巳ならば金岡主ハ承和より寛平ハ
主歯の事二説ありて詳なるべ〳〵ぬ古今目録ハよれば元慶元出生ハて寛
平元年ハ十三歳なり又一説ハ元慶八の生と云事然弄花抄ハ云〳〵金岡
子云〳〵除目成文抄ハ昌泰二年二月除目執筆時平公讃岐少目従八位下巨
勢朝臣相覽畫師云〳〵是ハ寛平元より十一年順の作なるべ〳〵ぬ相覽貫之など
ぞの書なりと云ぜこの〳〵昌泰延喜の比既ハ舊ハし物語なれど相覽貫

之をば書なりしを云なるべしと 抄頭書に云へり

◎ 據どころ

此物語ハ唐土天竺の書どもより奇しく珍らかなる事共を集取て作れり
始て寶樓閣經によりて得たるを得まどひつふハ云々の書、月宮殿の事
ハ某經などに出たる思へりと云しを本居翁の許に見を参らせたれバ赫映姫
の始終なる石の鉢、火鼠の裘、珠の枝、など唐土天竺の物名どもなれど彼
所の書に據れりと云るハさることなれど此の故事にも此彼似付る
る事も有ぬべし。抑赫映姫の竹中より現出たまひて天に昇給ふ事など
今世にこそ傳はらね諸國の風土記などにハ能似よれる事も有しなる
べし其不傳こそくちをしけれ纔に遺れる中にも山城風土記の加茂大
神の始終なる古事記、書紀、万葉集、などにも是に似たる事多かりしと云
遺れるにまれバ解の中に書入おきつる故事に言長けれども拔出て此巻に
末に載つるになむ

◎ 凡例

此ふミハ物語の出来たりしはじめとしもいへる皇國言を其言の侭に一言も
かへず假字に書記せる凡の書籍の中にハとりも甚く古き物にて
有けれバ写しつぐ世の程にハ詞をも書漏し文字をも写誤
れる甚多かりし、清少納言の御許の枕册子にも物語にてハしかも書などと
すまいバいひづ作者さへいとはしけれなれば定本の世にいるゝど書
附る甚くちをしくもありて物語の出来て甚しく遠からぬ當時すら如此

ものいまを幾百年を歴にはふ末世をも。大秀ものもふよ古代の書籍と云
その巻物も冊子も誤〻ハ書改る事易の〻ざるあれど誤まるも脱をるも
をて置つふど多のりけをさるハ巻物を紙を長〻継ふて置〻かはれど
誤をる時中ゐ〻一葉抜棄る事も煩を〻〻又冊子と云物も今世ハ如く
帋ハ端の方にてをもちてるハ抜取ゐ煩なのを古ハ厚き紙を中ゐてはぐち
て今俗ムサウトギと云ふ一葉ハ表裏ゐ書〻てあるまバ弱しやりでの〻聊なる誤な
ども直し漏ふる字なども傍ゐ書加へふ〻をも見苦しはれで法なく不
知ぬ見ゐて大方ハをて過しつるより世〻ふるまゝに其いと多く成も
く来ゐけるるぞ有める凡〻字形の似ふる或ハ音通など〻て書写の誤
なる又按ゐ今も物書写〻試ゐ脱をる事を多く非ぬ事を書添る事をさら

をを无もハなるれバ筆ハ勢ゐ〻てふと書添る事もあるぞ有る如此まバ今世ゐ至さハ正し
削去〻〻能く心を用べき事ぞ有る如此まバ今世ゐ至さハ正し
き本なれど唯一〻ハ定難き態ゐしあれで此度も得ふる本の限集へ
置く彼よりふ是よりけをと打傾つ〻先多くハ同本の多のふ方ゐけを写
本と板本とハ中〻ハ板本ハ方を憑剛〻覽〻板本ゐよると又いふ〻ぞや
覽ゐるなど〻強ゐ同類の多ゐも役難くて聊も勝ふ〻をと思ゐ役ひ又
彼も是も脱をと誤まりと見ゆふハ止事不得〻自己ゐ心もて補も除も
改もちつるハ无負氣ぞ〻ハをと思よゐるをえしも捨や〻でなん凡〻
異本に役〻も已ゐ私ゐも補も除も改もをつふハ悉皆本文ゐ印を附て
解ゐ彼によりり是ゐ役へをと云るをれまで委細ゐ斷みをつれバ其本

を探さ返さぶ疾返しつぼくなるまさど辨の搭まるぶ〳〵決さ誤と見ゆるハ然こふるるぬも有べし

○諸本ま異同あり〳〵改ふるるハ傍ま。点をつ〳〵○私ま補ひ改つるるハ・点をけ〳〵○衍まりと見さ〳〵削除つるハ其由委〳〵解ま

ちと わりつ○言重なりて衍〳〵ハ見ゆる物ゐ〳〵猶えしも不除で本けば なるハ左傍まこ点をさ〳〵ふ○誤字〳〵ハ見なぐ〳〵猶改難くて斯ゆやあ〳〵ゆと思えるるハ傍ま片假字もて訓ぐとのりをあ〳〵ふむ

○脱文と見え〳〵補ぐの〳〵ハ行中ま脱乎とまるしつ

今改正さゆ〳〵て校けるる本ハ小山氏ぐの抄。普〳〵世ま行えるる〳〵 板本を始ゆ〳〵て。佐野春樹とふふ人ぐ寛政十二年ま校合ふる本是ハ寫本ま〳〵橋本稲彦より御薗常言とふふ人の写傳ふる本なり其え古き寫本を本行と〳〵て安永二年武村美伎ぐの古写本、林鮒主ぐの古写本、上田百樹ぐ平信之ゆと校合ふる本、又活板本、などゆ悉〳〵書入ふる本なり。又健冬ぐの越中高岡ま〳〵得ふり〳〵て賚ふりけるえ甚古き板本ま〳〵よ〳〵〳〵と多のゆ（一冊四十一葉半面十一行ま〳〵奥書年記等なし此本健冬死〳〵後津國西宮中川惟幾けるめへ持ふり〳〵ぞ。）又羣書類從ぐけ本。又文政四年けば春難波〳〵て得ふる一写本。などを能考按定〳〵取〳〵本文とな〳〵つ

○抄本と云ハ小山氏ぐの抄の本文なり是ハ大氏普通板本〳〵同しさけ〳〵ふぐへるも絶〳〵無〳〵ハあ〳〵其〳〵○普本と記〳〵て分つ○写本と云え佐野春樹ぐの写本けば本行なり○古本〳〵ハ鮒主ぐの本なり○校本〳〵〳〵百樹ぐの本なり○活本〳〵ハ活板の本なり是ま写本の傍ま某

某記しふるを取たるなるとも○古板本とて健冬ゞの本なり○類本とも
群書類從奥書ゝ右以織部正乗尹主藏本写以ゝ本校合畢と有り　ゝ本なり○一本とて浪花ゝ
ゝ得ゝる本なり○譬へゞ抄本と写本と同しき類ハ其憑ひよき方
一本を擧ゝて悉ゝ不云
○内題ゝ無も有も有り抄本古板本ゝハ无し凡物語文、日記、なゞゝゝ類ひ
ゝるはゝゝ書ふるゝハ大方ゝ无しゝゝ外題のゝゝ内ゝハ題を不
書べき事なり写本ゝハ内ゝ竹取の翁ゝ物語と題きゝ今ハ是を取ゝ
外題とゝつ普本ゝふゝけゝり物語ゝなゝと竹取のと不云ゞゝ惡し凡て
伊勢の物語、ゝゝゝゝ物語、なゞやゝゝゝの字を讀ゞ舟べし。枕冊子ゝ有やし
ういきゝもゝのゝふりなるやなゞふゝゝ知べし。さて翁と云字ハ畧ゝ

有しゝゝぬよしハ上ゝいひつ
○河社ゝ契沖阿闍梨ゝ隨筆なり其一の卷ゝ末ゝ此物語の叟を記きゝ
ふり皆是ゝ取ゝたるゝつ○竹取物語抄二冊浪花人小山藤原儀、天明の
初のゝゝ病の間ゝ著きるゝ齢廿五ゝ身ゝのりける由其昆弟入江
昌憙ゞ序ゝ見ゝゝりゝゝ若ゝて漢籍、佛書、ゞゝ引出ふる才賢ゝのりけ
ゝほゞ推量ゝゝゝ甚ゝ惜き人なりゝのし。其頭書ハ即昌憙ゞ説なりゝ
ゞ是も序ゝ記きる。是ゝに引ふる書も説も用あるゝ皆ゝりつ。河社ゝ云、
或ハ細書ゝ。抄ゝ引ふり、又頭書抄のと不云に云ゞなゞ記しつ出書ちゝゝハ不
記もゝゝ○又師説なゞハ其本書ゝ讓ゝ委ゝゝ不云も多ゝゝと記傳ゝ云
るハ古事記傳なり○日本書紀ハ神武紀、仁德紀、なゞ云つ其天皇の御卷

なり。又宇津保物語、源氏物語、榮花物語、など巻の名なる物ハ源氏の宇都保のみ〳〵ハ不記ふ〳〵に明石巻、吹上巻、などもなる〳〵つ是らハ巻名ども能人の知く紛なく紛ぐ物なり。又扨冊子ハの五丁なり記るハ北村季吟翁の春曙抄より引出るなり源氏も湖月抄ハ役〳〵葉の次第をもなる〳〵つ

○凡〳〵詔云、曰云、白云、など何なる文を訓〳〵ハ先始ハ詔曰白とよこて其云云の語ハ終ハ又再とのり給ふ〳〵とまる〳〵に成〳〵云辞を訓付るぞ古語の格なる。古事記ハ天忍穂耳命詔之豊葦原之水穂國者伊多久佐夜藝豆有祁理告而なる出雲國造神賀詞ハ乃大穴持命乃申給久云〳〵申天古今集に親王云け〳〵〳〵狩して天の川原ハ至と云〳〵為をよこて孟さ〳〵せ〳〵云り給て。土左日記ハ檝取ハ云や〳〵黒き鳥のもと〳〵に白き浪を

よこ〳〵ぞいふ。玉蔓巻ハ此男〳〵を召とり〳〵かく〳〵ふ更ハ思さまに成など同じ心ハ勢ひをかく〳〵ぼ〳〵ハ更などかく〳〵ふハなど何りと師記傳巻一いと給かり。此物語〳〵ふさハ此格多くて赫映姫のるまく〳〵云〳〵とのるまま多翁いと〳〵云〳〵とふなど何なるを後の物語共〳〵ハ此格稀なく上ハのふ〳〵ふ〳〵いと〳〵〳〵と云言なくて某君云〳〵とのるまハ某云〳〵とふなど更も〳〵かく〳〵上ハ何なるハ詔云申給久申久云久語久云や〳〵かく〳〵ふ更ハなど云格なるを此物語ハ乃〳〵ふまふ云〳〵ふ云〳〵まに云〳〵なども多し豆ハ下へ付續き甚聞苦し此餘の物語〳〵ハ甚稀なり。落四物語巻三ハ三条家ハ徒ふ時男君文君ハ申給ふ人給よ〳〵所えをせふるを此十九日ハ徒らを云いと〳〵給〳〵〳〵。又巻四〳〵帥四君を迎る更と勧め〳〵そちのふ罷下るぞき程甚近し

三〻日ハ〻〻〻十餘日よなんみとのまへぞ總角巻ゑ姫君宇治大君思し煩〻辨の參るにのまゐ年頃も人ゑ不似薫君の御心よせとのこゝのいまひ續〻ぞ〻〻〻ぞ〻昱ゑハ甚稀なる吏部かゝ〻此書ゑものまゐ〻いはくハ多〻のふまふいふとゑ方ハ少なし又いふと一本ゑ有るを又一本〻〻いゑ〻〻と有る類ひも多のり強〻按ゑ昱ハ申云など字ゑ〻書つるを假字ゑ写ひ〻〻ひおゝひいふなど書つる誤の翁と五人の人〻とゑ詞ものまへゑと有べきをいへゝだ。申さバと云へきをもいへゝだ。などゑも〻きるあり有るこゝとの猶よく〻考べし

○此書ゑゑゑ〻ハ先本文を幾度もかへゝさひ讀ゆゑ〻次ゑ附錄の古吏を其段ゑかゑとのへ其解を見〻言ひ意をさゑゑり文の趣を知べし故今心得安の〻ゑとゑの爲ゑ假ゑ名目を設〻九段〻ふのもつるゑなゑ

巻一　○赫映姫おひ〻るもち

○妻〻ひ

巻二　○佛の御石ひ鉢

○蓬萊ひ玉の枝

巻三　○火鼠の裘

○龍の首ひ珠

巻四　○燕ひ子安貝

○御狩の行幸

巻五　○天の羽衣

是ハ人ぐ見安からむ為まゝ物しつゝバ元來かゝる事とハな思ひそさるばバ手よくかゝむ人なゞに此本文を取て美麗しくかゝせむ始より終まで一連に書續りて先の段ハ一行の半に終るとも次の段の始を改て頭に上てハ書べしなほさるばと今改ふる印などハ附おくはしさて凡て解ぶことゝ云物ハ其段の中にも又條〻分て註釈かよ隔て文詞はゝこのごとくばハ大肯ハ得ざるうらばバ今も本文ぞのうへに書出よかりしかばど書の甚拙に恥て今度ハえものぞんなむ

竹取翁物語解附録

此卷〻ハ此物語に似よりてある古事を解に引出べき事を言ばゞ〻て漏しつふことをも記しきるまなむ

田中大秀 撰

◎ 竹中に人を得ふふ

廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品ういて爾時衆中有金剛手菩薩摩訶薩頂禮釋迦牟尼如來合掌恭敬白佛言世尊今此塔中諸如來等從何而有從何而來佛言汝今諦聽當爲汝說乃往古昔不可思議無量無數阿僧祇劫此贍部洲中多諸人衆安穩豐樂五穀不種自然成熟人無彼我亦無積貯當此之時無有佛名有一大山名寶山王彼寶山中有三仙人一名寶髻二名

金髪者三名金剛髪彼三仙人繫心専念佛法僧寶復作是念我等何時證無上
正覺度脫一切諸衆生等時彼仙衆作是念已須臾黙念復起前念由是念故
即證慈悲歡喜一切衆生種〻樓閣三摩地獲於天眼觀彼上方見淨居天復
於空中有聲言曰善哉正士善哉正士能發上願求大正覺汝曾聞不有大妙
法名廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼往昔如來已曾演説善爲利益一切衆生
諸有聞者決定不退無上正覺〻此陀羅尼有如是等無量無邊不可思議力
時彼仙人得法歡喜欣慶踊躍於其住處如新醍醐消没於地即於没處而生
三竹七寶爲根金莖葉竿梢枝之上皆有眞珠香潔殊勝常有光明往來見者
靡不欣悅生滿十月便自裂破一一竹内各生一童子顔貌端正色相成就時
三童子亦既生已各於竹下結跏趺坐入諸禪定至第七日於其夜中皆成正

覺其身金色三十二相八十種好圓光嚴飾時彼三竹一一變成高妙樓閣〻
〇此經今ハ菩提流支三藏の譯とする黄檗山本を出〻つ河社より引き
ふるハ不空三藏の譯〻〻弘法大師の將來らせたまふるなり少し異な
れども大抵ハ同し廣大宝樓閣祕密善住陀羅尼の功德を説る經ぬ
ア契冲阿闍黎の云〻經〻ハ男子なるを女子ようなして是を本
據〻〻て竹取物語ハ書出きるのと云ふき實より然なるべし。こゝに經
今ハ取出て讀誦なゞ〻せざるを等持院殿三十三回忌明德元年
四月法華八講の記ぬ〻〻ハ乃御法と云書ぬ仙洞御所より宝樓閣
經より橘の打枝より郭公を添させたまひ〻今日ハ御法ぬ手向ましま
〻〻のり當時ハ廣〻讀し經なるとぞ

華陽國志ニ。有竹王者興遯水先是有女子浣于水濱有三大竹流入足間推之不去聞竹中有兒聲持歸破竹得男長有武支遂雄夷狄以竹為姓植死破竹于野遂成林今王祠竹林是也

○河社ニハ後漢書西南夷傳なるべし夜郎の傳を引き。夜郎者初有女子浣於遯水有三節大竹流入足間聞其中有號聲剖竹視之得一男兒歸養之及長有才武自立為夜郎侯以竹為姓云ふるハ只聊の異なるべし

幽怪錄ニ。鄭延長史有大竹凌雲可三尺圍伐之見內有二仙翁相對曰平生深根勁節惜為主人所伐言畢乘雲而去夷堅續志

○是ハ赫夜姫の升天ニも同じ右抄ニ引き

釋氏要覽ニ。甘蔗氏經云昔有轉輪王名大自在子孫相承合有八方四千王最後王名大茅草垂老无子乃委政大臣自剃髮出家衆號王僊極老不能行履諸弟子輩時行乞食遂以草籠盛王僊懸於樹虞虎狼之害也有獵人望見謂是白鳥乃射之死血瀝于地諸弟子歸見師被害卽共殯尸其血瀝之地後時忽生甘蔗二本日炙開剖一生童子一生童女大臣聞迎取歸宮養育長成以王種故遂立為王命氏甘蔗始也とあるハ寶樓閣經ニ似たり

○下學集ニ。甘蔗顧愷之每食蔗自尾至本曰漸入佳境又曰釋迦為甘蔗氏也ニ。本草和名ニ。甘蔗之夜反陶景注曰取汁為沙糖荻蔗楊玄操音狄七卷一名諸柘一名玕堵上音干下音柘已上二名出兼名苑唐頭注ニ按医心食性云和名久美食經云節疏而細

佛說柰女耆域因緣經後漢安世高譯にいとく如是我聞一時佛在羅閱祇國云坐

中有一比丘尼名曰柰女即從座起整服作禮長跪叉手白佛言世尊我自念
先世生波羅柰國爲貧女人時世有佛名曰迦葉時與大衆圍遶說法坐聞經
歡喜意欲布施顧無所有自惟貧賤心用悲感詣他園圃求乞果蓏當以施佛
時得一柰大而香好擎一盂水并柰一枚奉迦葉佛及諸衆僧佛知至意呪願
受之分布水柰一切周普緣此福祚壽盡生天得爲天后下生世間不由胞胎
九十一劫生柰華中端正鮮潔常識宿命今值世尊開示道眼云柰女禮已還
坐以上耆婆經 佛在世時羅耶黎國羅字耆婆經 國王苑中自然生一柰樹枝
葉繁茂實又加大既有九色香美非凡王寶愛此柰果字 自非中宮宮中 尊貴
美人不得啖噉 此柰果國中有梵志居士貧富無數一國无雙又聰明博達
戈智超群王重愛之用爲大臣請梵志飯食食一字 畢以一柰實與之梵志

見柰香美非凡乃問王曰此柰樹下寧有小栽可得乞不王曰大多小栽吾恐
妨其大樹輒除去之卿若欲得今當相與即以一柰栽與梵志梵志得歸種之
朝夕漑灌日日長大枝條茂好三年生實光彩大小如王家柰梵志大喜自念
我家資貧无數不減於王惟无此柰以爲不如今已得之爲无減王既乃取
食之而大苦澀了不可食梵志更大愁惱乃退思惟當是土无肥潤故耳乃捉
取百牛之湩乳以飲一牛復取一牛湩煎之之字 爲醍醐以灌柰根日日灌
之到至明年實乃甘美如王家柰而樹邊忽復生一瘤節大如手拳日日增長
梵志心念忽有此瘤節恐妨其實適欲所去恐復復恐傷樹連日思惟遲徊未
決而節中忽生一枝正指上向洪直調好高出樹頭去地七丈其抄乃分作諸
枝周圍傍出形如偃蓋華葉茂好勝於本樹梵志怪之不知枝上當何所有乃

作接閣登而視之見枝上優蓋之中乃有池水既清且香又有衆華彩色鮮明披視華中下と有一女兒在池華水と中梵志抱取帰長養之名曰柰女至年十五顔色端正天下无雙宜聞遠國有七國王同時俱來詣梵志所求娶柰女以爲夫人梵志大恐怖不知當以與誰乃於園中架一高樓以柰女著上出謂諸王曰此女字あり非我所生自出於柰樹之上亦字あり不知是天龍鬼神女耶鬼魅之物今七王俱來求之我設與一王六王當怒不敢愛惜女今在園中樓上諸王便共字なり自平二字なし議有應得者便自取去非我所制也於是七王口共爭諍と之紛紜未決至其夕夜萍沙王從伏竇中入登樓就之共宿明晨當去柰女白曰大王幸枉威尊接逮近と於我今復相捨而去若其有子則是王種當何所與付と王曰若是男兒當以還我若是女兒便以與汝王則即と脱手金鐶之印以付柰女以是爲信便出語群臣言我已得柰女與共と一宿亦无奇異故如凡人故不取耳萍沙軍中皆稱萬歳曰我王已得柰女六王聞之便各還去萍沙王去後遂便有娠時柰女勅守門人言若有求見我者當語言我病後日月滿生一男兒顔貌端正兒生則手持針藥囊梵志曰此國王之子而執醫器必醫王也云々名曰耆域云かゝて八歳まして父王の所ゟ到ると德叉尸羅國の人姓ハ阿提黎字ハ賓迦羅に医を学ひ藥王術を得て役外照内見人腹臓て病を瘥ひ業を得たり

○柰女耆婆經と題しふるも後漢安世高の譯まゝ文を省略ふる聊字の替まゝる所とゝ趣意など異ふる更なし因縁經ゟ耆域と名曰耆婆ゝ有り此經ゟ物語ゟ似ふる處多し○縁此福祚盡生天得爲天后下生世間不由胞胎云々ふ赫映姬天女ふるゞ今此土

よ生るゝゝ不由胞胎よ似ふり○披視華中有一女兒在池華中梵志
抱取帰長養之云々ゝある竹取翁竹中よ女兒を得て家よ帰て養育る
ふよ同し○奈女顔色端正天下无雙宣聞遠國有七國王同時俱來詣
梵志所求娉奈女云々ハ五人の人々赫映姫を得ントヽふふふ狀なり
○梵志謂諸王曰此非我所生と云るゝ竹取を喚出て女を我よ賜と
伏拜て手を摺宣ふるゝ自已の不生子なれハ心よも不令隨なる
ゆるとゝ云てと云るよ同し○自出於奈樹之上ハ造麻呂の手よ令生
ふる子なれ共非昔山なて見付ふる子なれ共云と○不知天
龍鬼神女耶鬼魅之物と云ゝ變化の人と申なるゝと同し意なゝふ
と○今七王俱來求之ハ五人ゝの人々の志ひとしなるゝ云よ似ふり

○我設與一王六王當怒ハひゝりゝくよ逢なるゝひふゝ云るゝ是を
反ゝゝゝゝるゝの如し又末よ
又奈女生時國中復有須曼女及波曇女亦同時俱生須曼女者生於須曼華
中國有加羅越家常採須曼以爲香膏採膏石邊忽作瘤節大如彈丸日日長
大至如手拳石便卒爆字破見石節之中有聚聚耿耿如螢火射出墮地三日
而生須曼又三日成華華舒中有小女兒加羅越取養之名曰須曼女長大姝
好及才明智慧亞次奈女爾此字時又有梵志家浴池中自然生青蓮華華特
加大日日長益益長如五斗瓶華舒中見見中有女兒梵志取養之名曰字波
曇女長大又好才明智慧如須曼女諸國王聞此二女顔容絶世交來求娉之
二女曰我生不由胞胎乃出草華之中豈與凡人不同何豈宜當隨世人乃

復嫁耶云々とあり

○此は二女曰我生云々豈與凡人不同何宜當隨世人乃復嫁耶と云る

赫映姫の五人は人々なれども天皇なれども逢ゐて終は男ちぎりとしは能

似たり○柰は和名抄に。本草云榛子上音内字亦作柰和名兼名苑云

柰以一云加良奈之

捷音速一名掩音掩柰也はゝ本草和名に。榛仁謂作柰又有林檎相似而小執子狀如小梨

榛子糸似榛色赤音餘冉反已上二名出崔禹一名捷音速出兼名苑榛一名椁一名掩已上二名和

名奈以一名布奈江頭注に按医心江作以はゝ字書に柰正韻尼帶切、説文果名

廣韻柰有青白赤三種々あり○抄に柰女耆婆經を引て今は柰女耆

域因縁經の方を引つ

◎ 物は變化〳〵人になる

古事記中巻に昔有新羅國主之子名謂天之日矛是人參渡來

者新羅國有一沼名謂阿具奴摩此沼之邊一賤女晝寢於是日耀如虹指其

陰上亦有一賤夫思異其狀恒伺其女人之行故是女人自其晝寢時姙身生

赤玉爾其所伺賤夫乞取其玉恒裹著腰此人營田於山谷之間故耕人等之

飲食負一牛而入山谷之中遇逢其國主之子天之日矛爾問其人曰何汝飲

食負牛入山谷汝必殺食是牛即捕其人將入獄囚其人答曰吾非殺牛唯送

田人之食耳然猶不赦爾解其腰之玉幣其國主之子故赦其賤夫將來其玉

置於床邊即化美麗孃子仍娶爲嫡妻爾其孃子常設種種之珍味恒食其夫

故其國主之子心奢詈妻其女人言凡吾者非應爲汝妻之女將行吾祖之國

即竊乘小船逃遁渡來留于難波此者坐難波之比賣碁曾社謂阿加流比賣神者也

○書紀乃垂仁巻なる都怒我阿羅斯等が叟ハ異傳なり其件の詞ゑ
其神石化美麗童女〳〵ゐる。靈異記巻下ゑ。女人産生石以之為神而齋縁
第卅一〳〵ゐる條に。美乃國方縣郡水野郷楠見村有一女人姓縣氏也
年迄于廿有餘歳不嫁未通而身懐任胎之三年山部天皇世延暦元年
矣家春二月下旬産生二石方丈五寸一色青白斑一色專青毎年增長
有比郡名曰淳見是郡部内有大神名曰伊奈婆託卜者言其産二石是
我子因其女家内立忌籬而齋往古今来未都見聞是怪我聖朝奇異事
矣猶此神の御叟在野冊子ゑ記しつるを可考〳〵ゐるハ彼天日矛の赤玉ゑ似ゑり
山城風土記ゑ。賀茂建角身命娶丹波國神野神伊可古夜日女生子名玉依
日子次曰玉依日賣玉依日賣於石川瀬見小川遊為時丹塗矢自川上流下

乃取拝置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建角身命造八尋屋竪八戸扉
釀八腹酒而神集〳〵而七日七夜樂遊然與子語言汝父將思人令飲此酒即
擧酒坏向天為祭分穿屋壹而升於天乃因外祖父之名号可茂別雷命所謂
丹塗矢者乙訓郡社坐火雷命在
○澤日本紀ゑ云賀茂別雷命父丹塗矢乙訓坐火雷神社是也亦秦氏
大赤帳者戸上矢者松尾大明神是也松尾大明神者大山咋神用鳴鏑
水以上用字以下誤字なるべ〳〵記傳十二ゑ載〳〵なるを引つ　按ゑ風土記ゑ向天為祭〳〵ゐる天
字ハ矢字を写誤ゑる歟
古事記中巻白檮原宮段に。更求為大后之美人時大久米命曰此間有媛女是
謂神御子其所以謂神御子者三嶋湟咋之女名勢夜陀多良比賣其容姿麗

美故美和之大物主神見感而其美人爲大便之時化丹塗矢自其爲大便之溝流下突其美人之富登尒其美人驚而立走伊須〻岐伎乃將來其矢置於床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多〻良伊須〻岐比賣命亦名謂比賣多〻良伊須氣余理比賣故是以謂神御子也

○古事記なるゝ風土記ゝ丹塗矢の男ゝ化ゝ成ふ同狀なり又風土記ハ赫映姫の天ゝ升まるも同し類なり

萬葉集卷三ゝ

仙柘枝歌三首

霞零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取此歌ハ詠仙柘枝歌ゝ入まるなるべし今ハ非に一〻脫て此歌の本の尾ゝにまる〻〻

右一首或云吉野人味稻與柘枝仙媛歌也但見柘枝傳無有此歌此暮柘之左枝乃流來者梁者不打而不取香聞將有

右一首

古尒梁打人乃無有世伐此間毛有益柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

懷風藻〻

贈正一位太政大臣藤原朝臣史　五言遊吉野

飛文山水地命爵薜蘿中漆姫控鶴擧柘媛接莫通煙光巖上翠日影濤前紅翻知玄圃近對翫入松風

太宰大貳正四位下紀朝臣男人　七言遊吉野川

万丈崇巖削成秀、千尋素濤逆桁流欲訪鍾池越潭跡留連美稻逢槎洲

従三位中納言丹墀真人廣成　五言遊吉野山

山水隨臨賞巖谿望新朝著度峰翼夕翫躍潭鱗放曠多幽趣超然少俗塵、栖心佳野域尋問美稻津、着疑看誤

七言吉野之作

高嶺嵯峨多奇勢、長河渺漫作迴流鍾地超潭豈凡類、美稻逢仙月氷洲

○猶此仙女の吏ハ次ヨ載る仁明天皇四十御賀の歌まもゝあり。慥なる傳ヒ有ゝむと今ハ失なひつるまゝ。万葉集ヒ解ヨ古へ吉野ヒ里の女、仙と成て在しゞ同所ヨ味稻と云男川ヨ梁打ゝ魚とゝるヨ其仙女柘枝と化ゝ流來て其梁に留まりぬ男ゝ彼を取て置ヨ麗ゝ女となりしを愛て相住けるゝと云吏なりと云ヒ。玉依比賣丹塗矢を取ゝ床の邊ヨ置ゆゝ〜ヨ似ゝり○柘ハ和名抄ヨ毛詩注云桑柘音射漢語抄云豆美蠶所食也

書紀雄略卷ヨいゝ〜〜大泊瀬天皇二十二年秋七月丹波國餘佐郡管川人水江浦嶋子乘舟而釣遂得大龜便化爲女於是浦嶋子感以爲婦相逐入海到蓬萊山歴覩仙衆語在別卷

續後紀卷第十九ヨ。仁明天皇嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十云〜更作天人下拾芥子天衣羅拂石翻擎御藥俱來祇候及浦嶋子暫昇雲漢而得長生吉野女眇通上天而來去等像副之長歌奉獻其長歌詞曰日本乃野馬臺能國遠云何志帝之御世萬代亦重祢飾弖奉令

栄度拓之技乃由求礼波佛許曽願成志多云倍大海乃白浪開呂常世嶋國成建天
到住美聞見人波萬世能寿遠延津倍故事介云語來留澄江能淵介釣世志皇之
民浦嶋子加天女釣良礼來呂紫雲泛引呂片時介將呂飛往天昱曽此乃常世
之國度語良比呂七日經志加良无限久命有志波此嶋介曽有介良志三吉野介有志
態志祢天女來通呂其後波蒙譴天比礼衣著呂飛尓支度云昱介此之嶋根乃
人介許曽有岐度云那云礼

○紀の文ヲ浦嶋子暫昇雲漢而得長生ト云ヘル歌ヨ亀姫ヲ天女釣ラ
ル来ルトヽメル傳ヨリ來ルコトヽ○万葉の左注ヨ味稲。詩ヨ美稲ト書
ルハ宇万志祢ト訓ベキヽヲ此哥ヽハ熊志祢トヨメル。又此仙女後
に天ヨ升しの文ヨ吉野女眇通上天而來且去ヽヒ哥ヨひ衣著

ヽ飛去きヽと云ヽとあり

丹後國風土記釋紀ヨ引ルに云く。與謝郡与射郡本丹波和銅六年割日置里本丹波國五郡始置丹後國作量集解改作置和名抄ヨ与射郡日置郷あり此里有筒川村此人夫日下部首等先祖名云筒川嶼
子爲人姿容秀美風流无類斯所謂水江浦嶼子者也昱舊宰伊類部馬養連
所記无相乖故略陳所由之肯長谷朝倉宮御宇天皇御世嶼子獨乘小船汎
出海中爲釣經三日三夜不得一魚乃得五色龜心思奇異置于船中卽寐忽
爲婦人其容美麗更不可比嶼子問曰人宅遥遠海庭人乏詎人忽來女娘微
咲對曰風流之士獨汎蒼海不勝近談就風雲來嶼子復問曰風雲何處來女
答曰天上仙家之人也請君勿疑乘相談之愛爰嶼子知神女慎懼疑心女娘
語曰賤妾之意共天地畢俱日月極但君奈何早先許不之意嶼子答曰更无

歿言何觸乎女娘曰君宜迴棹赴于蓬山嶼子從往女娘教令眠目即不意之間至海中博大之嶋其地如敷玉廡臺臉映樓堂玲瓏目所不見耳所不聞携手徐行到一大宅之門女娘曰君且立此處開門入内即七竪子來相語曰昱龜比賣之夫也亦八竪子來相語曰昱龜比賣之夫也茲知女娘之名龜比賣乃女娘出來嶼子語竪子等叟女娘曰其七竪子者昴星也其八竪子者畢星也君莫怪焉即立前引導進入于内女娘父母共相迎揖定座于斯稱説人間仙都之別談議人神偶會之嘉乃雪百品芳味兄弟姊妹等舉坏獻酬隣里幼女等紅顏戲接仙哥寥亮神儛婆娑其爲歡宴萬倍人間於茲不知日暮但黄昏之時群仙侶等漸〻退散即女娘獨留雙眉接袖成夫婦之理于時嶼子遺舊俗遊仙都既經三歲忽起懷土之心獨戀二親故吟哀繁發嗟歎日益女娘

問曰此來觀君夫之貞異於常時願聞其志嶼子對曰古人言少人懷土死狐首岳僕以虛談今斯信然也女娘問曰君欲歸乎嶼子答曰僕近離親故之俗遠入神仙之堺不忍戀眷輒申輕慮所望暫還本俗奉拜二親女娘拭淚歎曰意等金石共期萬歲何眷鄉里棄遺一時即相携徘徊相談慟哀遂接袂退去就于岐路於是女娘父母親族俱悲別送之女娘取玉匣授嶼子謂曰君終不遺賤妾有眷尋者堅握匣慎莫開見即相分乘船仍教令眠目忽到本土筒川鄉即瞻眺村邑人物遷易更无所由爰問鄉人曰水江浦嶼子之家人今在何處鄉人答曰君何處人問舊遠人乎吾聞古老等相傳曰先世有水江浦嶼子獨遊蒼海復不還來今經三百餘歲者何忽問此乎即銜弃心雖迴鄉里不會一親既送旬日乃撫玉匣而感思神女於嶼子忘前日期忽開玉匣即未瞻之

間芳蘭之體率于風雲翩飛蒼天嶼子即玉違期要還知復難會迴首踟躕咽
涙俳徊于斯拭涙哥曰
等許余弊尓、久母多智和多留、美頭能蒼能、宇良志麻能古賀、計等母知多
留、弊字本〻薛と作るを今改久字父と誤まり下皆同し
蒼ハ脣字を誤まり結句誤脫あり〻讀得べ〻
又神女遙飛芳音哥曰
夜麻等弊尓、加豆布企阿義天久母婆奈禮、弊企遠理等母與、和遠和須良
奈、第四句の與字後人の加へるこの結句良の下須字を脫きり此哥古
支記高津宮段に天皇吉備國に行幸し時黑日賣の獻哥なり其に
ハ第二句尓斯布岐阿宜呂結
句和礼和須礼米夜と有り
嶼子更不勝戀望哥曰
古良尓古非、阿佐乃遠比良企、和我遠礼波、等許與能波麻能、奈美能遠等
企許由、遠等の遠字假字格なるべし
後時人追加哥曰
美頭能蒼能宇良志麻能古我多麻久志義、阿氣受阿理世波、麻多母阿波
麻志
等許與弊尓、久母多知和多留、多由女久女波都賀未等和礼曾加奈志企、
第三第四句誤字
脫字あり〻讀えず
○始の歌拭涙哥曰〻何まで〻も嶼子の歌〻を聞えず必後人の作な
るべし。大和物語の津國に處女墓の段に其男女に代り〻人〻歌よ
めふ同類なり○本朝神仙傳釋紀卷十二右の傳に次に引き
大氏同樣なり〻文を約く記きりにハ逢
人問之曰云漸過百年なり浦島子傳類從百三十
五の卷に載ハ不値七世之孫

云々にある續浦島子傳記（類従同巻）ハ古老口傳而經數百歳傳來語曰云々に
ある寫本の後紀に淳和天皇天長二年今歳浦島子歸郷雄畧天皇御宇
入海至今三百四十七年也云々とあり書紀通證に谷響集曰舍人親王
撰日本紀者在養老八年先天長二年者過一百歳焉是知云天長二年
者得非不替之失乎本朝神仙傳云百年而歸此說爲是云々と云へる
万葉集巻九に詠水江浦島子歌一首幷短歌を載たり是等大同小異
ありて其歌に墨吉之岸尓出居而釣船之得乎良布（手湯多布の誤かと云り）見者古
之事曾所念水江之浦島兒之云々とある浦島子傳に忽至故郷澄江浦と
あるを神仙傳に水江浦人也とあるハ誤れり橘翁云墨吉ハ與謝郡に
も在なるべし水江ハ氏にて墨吉とハ異なりと云れたり。大秀按に

風土記に日下部首等先祖とあるを思へば水江ハ所謂字なるにあらむ
廣博物志（未本書を見ず譯して抄に引るをとれり）に云く唐土の義興といふ所に呉堪と云
人在けり若くして縣の吏となりぬ其が家ハ荊溪と云川に近かりき或時
其河邊にて大なる螺を得てけり取て歸て家に置けるに急に美麗しき女
に化ぬ呉堪よろこびて己が妻として住けり人名けて螺婦といふ縣
れこゝ是を聞て彼女を思ていかにもして得まくと思て呉堪を呼て云や
う世に蝦蟆毛と云物あなり其捉て來たらのしバ汝が妻を參らせよと
責徴に呉堪家に歸て云て愁たれバ螺婦が云く其ハ甚易き事にこ
そあれ大なる蝦蟆に毛生たるを捉來て與へつ悦てかの守の許に詣て奉
けれバ守が云く此度ハ鬼の臂をとり乞ぬ呉堪また妻に談合に是も易き

吏〻〻速く取來ぬ守是を見るに誠に懼〻き鬼の臂なりと見つ斯世に
なき物を云に從ひ〻も〻來れば守せんこの〻ゐて思煩く此度ハ聞も
ゆゑ〻ぬ物をと思く詞ぶこそ聞分ぎ〻ゐ〻に禍斗をもてこと云け
る家に帰く又の〻云るハ如何に為ましさそ〻る如何なる物ぞ〻問へば
螺婦ぞ云〻遠き國の獣なりと云く是を須臾の間に取來つ守此獣を
見る〻唯尋常に犬に異更ゐし禍斗〻ハいぶて云ぞ〻云へバ答く申さく
此獣ハ火を食物〻〻て火の屎を送ると云へバ守さ〻ばて火を令食
ゆさ〻ゐぞ〻食く暫〻〻火の屎を放るに其火頻く燃着く〻て屋
ども〻〻焼に焼く守に一家に人〻も皆悉焼死るもさ〻ぞ螺婦ハ天女
に類ゆ〻と語傳し〻なる

○螺婦ぞ云ふ龜姫に似たり又世になるゆ〻ゆ乞る此物語に似たり

扶桑略記巻第廿二 残缺第六冊 に善家秘記云余寛平五年出為備中介時有賀
夜郡人賀陽良藤者頗有貨殖以錢為備前少目至于寛平八年秩罷居住本
郷葺守其妻淫奔入京良藤鰥居於一室忽覺心神狂乱獨居執筆諷吟和歌
如有挑女通書之狀或時有與女兒通慇懃之辞然而不見其形如此數十日
一朝俄失良藤所在墾家尋求遂無相遇良藤兄大領豊仲弟統領豊蔭吉備
津彦神宮祢宜豊恒及良藤男左兵衛志忠貞等皆豪富之人也皆謂良藤狂
悖自捨其身悲哽懊惱求其屍所在然猶無遇俱發願云若得良藤死骸當造
十一面觀世音菩薩像即伐栢樹與良藤形躰長短相等向之頂礼誓願如此
十三日良藤自其宅藏下出來顔色憔悴如病黄癉者又其藏无柱唯石上居

折〻下去地纔四五寸曾不可容身而良藤心情醒寤話云鰥居日久心中常念與女通接於是女兒一人以書着菊華云公主有愛念主人之情故奉書通慇懃即開書讀之艶詞佳美心情揺蕩如此往反數度書中有和歌遍唱和彼遂以筋車迎之騎馬先導者四人行數十里許至一宮門老太夫一人迎門云僕此公主家令也公主令僕引丈人於是從家令入門屏間其殿屋帷帳綺餝甚美須臾薦珍饌未盡備日暮即入燕寢終成懐好意愛纒密雖死無恨晝則同筵夜則併枕比翼連理猶如疎隔遂生一男兒〻聡悟狀貌美麗朝夕抱持未嘗離膝下常念改長男忠貞為庶子以此兒為嫡子此為其母之貴也居三个年忽有優婆塞持杖直昇公主殿上侍人男女皆盡逃散公主又隠不見優婆塞以杖突我背令出狹隘之間顧而視之此我家藏桁下也於是家中大小大怪即毀藏而視之狐數十散走入山藏下猶有良藤座臥之處良藤居藏下纔十三个日也而今謂三年又藏桁下纔四五寸而今良藤知高門縮形出入其中又以藏下令如大殿帷帳皆霊狐之妖惑也又優婆塞者此觀音之變身也大悲之力脱此邪妖而已其後良藤無恙十餘年〻六十一死〻ぬ

○浦嶼子ゐ亀姫ゑ誘なくゝ仙宮ゑ入しと此良藤ゐ狐ゑ通接と相似るゝ嶼子ハ百年を三年と思ひ良藤ハ十三日を三年と思つゝ長を短し仙短を長きる妖仙術と妖惑と共ゑ奇怪〻きゝなる

○猶霊異記上巻第三条ゑ尾張國阿育知郡片葩里の農父ゑ前ゑ墮くる雷小兒と成しこと元興寺逆場法師の傳なり又同巻第二条美濃國大野郡の人狐ゑ女ゑ化まるを妻とせし事なゝどゝのゆゑで今ハ畧つ

◎妻問ふ

古事記上巻に故此大國主神之兄弟八十神坐其八十神各有欲娶稻羽之八上比賣之心共行稻羽時於大穴牟遲神負伴爲從者率往白兎の段を畧於是八上比賣答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神故尒八十神怒欲殺大穴牟遲神共議而至伯伎國之手間山本云赤猪の吏又根堅洲國此段を畧故其八上比賣者如先期美刀阿多波志都

同記中巻ヨリ故其天之日矛持渡來物者玉津寶云而珠二貫又振浪比礼切浪比礼振風比礼切風比礼又奥津鏡邊津鏡并八種也此者伊豆志之八前大神也故茲神之女名伊豆志袁登賣神坐也故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣皆不得婚於是有二神兄號秋山之下氷壯夫弟名春山之霞壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志袁登賣不得婚汝得此孃子乎答曰易得也尒其兄曰若汝有得此孃子者避上下衣服量身高而釀甕酒亦山河之物悉備設爲宇礼豆玖云尒尒其弟如兄言具白其母即其母取布遲葛而一宿之間織縫衣褌及襪沓亦作弓矢令服其衣褌等令取其弓矢遣其孃子之家者其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之霞壯夫以其弓矢繫孃子之廁尒伊豆志袁登賣思異其花將來之時立其孃子之後入其屋即婚故生一子也尒白其兄曰吾者得伊豆志袁登賣於是其兄慷愾弟之婚以不償其宇礼豆玖之物尒愁白其母之時御祖答曰我御世之事能許曾神習又宇都志岐青人草習乎不償其物恨其兄子乃取其伊豆志河之河嶋之節竹而作八目之荒籠取其河石合鹽而裹其竹葉令詛言如此竹葉青如此竹葉萎而青萎又如此鹽之盈

乾而盈乾又如此石之沈而沈臥如此令詛置於畑上是以其兄八年之間于
萎病枯故其兄患泣請其御祖者即令返詛戸於是其身如本以安平也

○伊豆志袁登賣ハ 伊豆志大神の女と坂るを思へど是も彼八種ゝ
玉津寶の男ゝ化〳〵令産給ふ〳〵彼丹塗矢ゝ天日矛の玉なゞ
の同様なる來由も有しなるべし是ハ明宮段の末ゝ載るべき甚
上代ゝ支那るべし

同記下巻 伊波礼之甕栗宮段ゝ意富祁命袁祁命播磨國より宮ゝ上ゝ〳〵
事を記〳〵て次ゝ故天下ゝ治らしめ給ふとする間に平群臣の祖名ハ志毘
臣歌垣ゝ立〳〵袁祁命ゝ乞さむ〳〵する美人の手をとらへ其孃子ハ菟田
首等の女名ハ大魚と云て袁祁命も歌垣ゝ立〳〵て歌ひ給〳〵

潮瀬の波折を見ゝで遊〳〵る鮪の鰭手ゝ妻をとり見ゝ
是ゝ志毘臣ゝ歌ひ給〳〵

大宮ゝ彼を〳〵鰭手すこか〳〵ぶらり
かく〳〵歌ひ〳〵其歌の末を〳〵ふ時ゝ袁祁命〳〵ひ給〳〵
於ゝ〳〵ゝ〳〵をゞなこゝそすこのゝぶらり
かゝ〳〵歌ひ給〳〵

おゝきこゝゝ心をゆ〳〵み臣ゝ子の八重ゝ柴垣入給へる
かゝ志毘臣いよ〳〵急〳〵歌ひけ〳〵
大君のこゝゝゝゝゞのゝ八節ゞより結もゝほし き経ゝ柴垣やけもゝ
ゞこのゝ

介ム王子まる歌ひくまはく

みふをよし鮪つく海人よ、そこの所をバ、宮〳〵こそ、しけむ、鮪つく〳〵もゝび、

如此うつひく鬪明して所〳〵けまゝ〳〵ぬけ〳〵め〳〵意富祁命表祁命二たし

議るまよ〳〵凡く朝廷の人どもハ旦つゑ朝廷ま參ゑ畫ハ志毘ゞの門ま

ゝ〳〵ふかゑ今ゑ志毘必い孫ゑ〳〵む其門〳〵人もなゑむ故今なゝびハ謀

難ゑゑと謀〳〵即軍を與〳〵て志毘臣ゞの家を圍〳〵殺ゑまひき

○師の古事記傳巻四十三ま云く抑上件哥垣ま贈荅し賜へる哥ども此

記書紀共ま傳の紛れ誤ゑと見〳〵或ハ作者易ゑ或ハ次第乱き或

も脱ゑると所念きなど穩なゝぞる吏共の互ま考ゑ今能考正さむ

〳〵てゝ〳〵思巡らして心の及べる限ハ云ゑども猶慥まく決め

難き吏共も所ゑるを猶よ〳〵考べき吏なりと云ゑき今ハ其次第を改

ゑ〳〵ゑるま從て假字ま書へるゝなり

萬葉集巻第一に中大兄命三山御歌

高山波雲根火雄男志等、耳梨與相諍競伎神代從如此介有良之古昔母

然介有許曾虚蟬毛嬬乎、相搏良思吉

反歌

高山與耳梨山與、相之時、立見介來之、伊奈美國波良、

○此大御歌ハ天智天皇太子まおゝしまゝ時播磨國ま幸まして

神集てふ所まて其處の故吏を聞しめ〳〵作へるなり。其古事ハ

播磨風土記ま。出雲國阿菩大神聞大和國畝火香山耳梨三山相鬪以

此謌諫山欲諫止の誤なるべし　上來之時到此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之
故号神集之覆形とぞ〳〵

同集巻第九に詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌

鶏鳴吾妻乃國尓、古昔尓、有家留事登、至今不絶言來、勝牡鹿乃、真間乃手
兒奈我麻衣尓青衿着、直佐麻乎、裳者織服而、髪谷毋、掻者不抗、履乎谷不
着雖行、錦綾之中丹裹有、齋兒毛、妹尓将及哉、望月之滿有面輪二、如花咲
而立有者、夏蟲乃、入火之如、水門入尓、船已臭如久、歸香具禮、人乃言時、幾
時毛、不生物乎、何為跡歟、身乎多名知而、浪音乃、驟湊之奥津城尓、妹之臥
勢流、遠代尓、有家類事乎、昨日霜、将見我其登毛、所念可毋、

反歌

勝牡鹿之真間之井見者、立平之水挹家年、手兒名之所念、

○猶此吏をよそる巻三に山部赤人が長歌短歌三首あり　巻十四に下
總歌二首あり

同集巻第十六に昔者有娘子字曰櫻兒也于時有二壯士共詐此娘而捐生
搭競貪死相敵於是娘子歎欲曰從古來于今未聞未見一女之身往適二門
矣方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息尓乃尋入林中懸樹經死其
兩壯士不敢哀慟血泣漣襟各陳心緒作歌二首

春去者、挿頭尓将為跡、我念之櫻花者散去流香聞、去下家字を脱きるこの
妹之名尓、繫有櫻、花所者、常哉将戀、弥年之羽尓、

ある同巻に或曰、昔有三男同娉一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三

雄之志難平如石遂乃彷徨池上沈没水底於時其壯士等不勝哀頽之至各陳所心作歌三首 娘子字曰鬘兒也

無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來乍潜者水波將涸

足曳之山縵之兒今日往跡吾尓告世婆還來麻之乎 還ハ迚の誤

足曳之山縵之兒如今日何隈乎見管來尓監

○手兒名櫻兒縵兒を戀する男の多き赫映姫に似たり

大和物語百卅二段に昔津國にすむ女ありけるに其をとこ男二人なむ有けふ一人は其國に住男姓は菟原になむありける今一人は和泉國の人にぞなむありける姓は茅沼とぞ云ける かくて其男ども年齢顔形人はわど唯同し計なむありける志の勝らむまさりは逢めと思ふに心差のほど唯同

やうなり暮ぬれば諸共に來ありけぬ物遣ぬれば唯同やうにぞ何を勝ぬるとぞ云ぼくもあるべき女思煩ひぬ此人こそ心ざしぬ疎なるべき何ぬるも逢まじかれど是も彼も月日を經て家の門に立て萬に志を見てけるぞ志ぶかぬ是よりも彼よりも同やうに於ぬる物ども取も不入ど色に持てふるまひて親にかくかくと見苦しく年月を歴て人の歎をいふべきに負もいとほしかりけれ逢なば今一人の思ハ絶なんと云に此もさもあるべき人の志は同やうなるまに思煩ひぬるさまぼいとすぢにと云に當時生田川のほとりに帝を打まゐらせけりかくて其よりぬる人びとを喚よせて親は云やうに誰も御心ざしの同やうなるべば此をぞれよりなん思煩ひすべきに今日何にまよひ此度を定てん或ハ遠き所よ

まいつまひける人あり或ハ此なごの〻其勞かをりなし是も彼もいふかひなしまた態なりと云時ハ甚かなしく悦ひあつる申さんと思ひつるやうハ此川に浮て住る水鳥を射くるまへ其を射中ひてまへ人ハ見てまつむと云時ハ甚よひ吏なりと云く射るかごに一人ハ頭の方を射つ今一人ハ尾ひ方をいつ其時いづれと云ばくもいつぬ女思ひづひく

住ひびぬ我身なげてむ津の國ひ生田の川ハ名のミなりけるとよみく此ひくぐりハ川まのぐひてきまふりけきバけづりと落入まくり親ハ

まて騒きのこしる間ハ此よぐふ男二人やどのく同所ハ落入ぬ一人ハ足をとくく一人ハ手をとくく死ひり其時親いとどく騒く取上〻泣のこまて葬ひに男どもひ親も來ようけと此女の塚ひ傍ハ又塚ども造く

掘埋ひ時ハ津國の男ひ親云やうこ同國の男をこて同所ハきをこと國の人ひいのて此國ひ土をを侵ひべきと云く妨る時ハ和泉の方ひ和泉國の土を舟ハ運く此ハもて來くなむ遂ハ埋くけるきをぐ女の墓ふぐ中まて左右になん男の墓ども今も在なるかくふ吏どもひ昔在けるひ繪ハ皆うひく故后宮ハ奉けをぐ是ぞ上を皆人く此人ハ代くよみける伊勢の御息所

影くひこ水の下るくひのひこをどもまなひこのくふかひなりけるま女ハ成ふまひくく女一の宮

限なくふのく沈める我魂をうひくる人こ見えをもひこのは

又こや

いづこゝの魂をもとゝめわつらはしかゝとゝも思ふなくう

兵庫の命婦

けちのよはゝ諸ゝもうゝで契けるひかゝゝを人ゝ見えぬ物のゝ

糸所のゝゝゝ

勝負もなくてやゝて君ゝゝうり思ゝゝぬる山ハうゝ

いきゝゝりしをりゝ女ゝなるとて

逢ゝゝゝのゝとゝゝふなゝ竹の立ゝゝゝふと聞ぞかなしゝ

又人

身を投ゝゝのゝゝと人ゝちきゝゝ孫どゝゝ身ハ水ゝかゝゝなゝゝゝ

又今ひゝゝゝゝ男ゝなりて

おなじ江ゝ住ハうゝゝしき中なまゝどゝゝゝど我ゝゝゝと契らざりけゝ

かゝゝゝ女

ゝゝゝけゝ我ゝなゝゝゝを大ゝゝふハかゝゝふ契のなゝゝゝゝしゝゝ

又一人の男ゝなりて

我ゝゝゝちきゝゝゝなゝゝ同し江ゝ住ハ嬉しきみぎゝゝゝ思ふ下畧

○此故吏をよめる万葉集巻九ゝ過葦屋處女墓時作歌一首并短歌

二首卅三

のひゝ　ゝゝ見菟原處女墓歌一首并短歌二首卅五丁　ゝゝ巻十九ゝ大

伴家持卿の追和處女墓歌一首并短歌ゝゝ。古ゝ語傳ゝゝ更ゝゝ今

も猶其墓ゝゝゝ。巻九の上ゝ長歌ゝ古之益荒丁子各競妻問為祁

年云ゝ下なゝゝ虚木綿乃牢而座在者、見而師香跡、悒憤時之垣廬成人

之詭時云々有り。此物語は帳の内よりも出さんと赫映姫を得てし
ごの水見てしごなく云々有りを不離君ぞ夜を明し日を暮す人多こ
の云、其中は猶云けるを云々五人々有るに似たり。此大和物語文ハ此吏
を略たり。此長哥どもに生田川の水鳥を射しことゝ云ふ。宗串呂黄
泉尓将待跡云々血沼壯士、其夜夢見、取次寸追去祁礼婆云々を思へど
處女の死し後は壯士々慕行しなり。卷十九なるに離家海邊尓出立
云々節間毛惜命乎露霜之、過麻之尓家礼云々とは海は身を投ること
死し〳〵めと云々ば水鳥の吏ハ後は面白く作加ふる物語なるべし。此
女身を投すゝてよめる歌も古き調はあゝ伊勢の御なごゝは彼
男女の意は成てよまれし如く後人は追加ふるなるべし

萬葉集卷第九は詠上総末珠名娘子一首并短歌

水長鳥安房尓繼有梓弓末乃珠名者、胸別之廣吾妹、腰細之須輕娘子之、
其姿之端正尓、如花咲而立者、玉桙乃道行人者、已行道者不去而、不召尓、
門至奴、指並隣之君者、預己妻離而、不乞尓、鎰左倍奉人乃皆、如是迷有者、
容艶縁而曾妹者、多波礼豆有家留、

反歌

金門尓之人乃來立者、夜中母、身者田菜不知、出曾相來

○是等はるゞ〳〵猶多このはどはぶきつ

◎ 佛の御石鉢

普曜經西晉竺法護訳 卷第七上鉢品は曰く尓時提謂波利之等与賈人俱五百為

徂於時樹木華實茂盛演佛定意七日不動不搖時有梵天厥名識乾住于梵天見佛新得道快坐七日未有獻食者我當求人令飯上佛即使五百賈人皆躓不行識乾先世五百賈人之知識也欲度之故故使然矣提謂波利驚怖而還与衆共議諸天即時而說偈言

如來成佛道　所願已具足　汝等貢上食　因是轉法輪

時五百人詣樹神所梵作神現光像分明言今世有佛在拘留國界尼連禪水邊未有致食者汝曹宜先能有善意必獲大福賈人聞佛名皆大喜言佛必獨大尊天神所敬非凡品也即和麨密俱於樹下稽首上佛佛念先古諸佛哀受人施法皆持鉢不宜如餘道人手受食也時四天王於頻那山上得四枚青石之鉢欲於中食時有天子名曰照明謂四王曰今者有佛名釋迦文應用斯鉢非人之器今當受食可往奉之於是四王即与天子華香妓樂旛蓋并鉢如屈臂頃俱下詣佛四天王各取所持之鉢共貢上佛佛念取一不快餘人意當悉納之提頭賴王先以獻佛佛即受之而爲說偈言

今授世尊器　當獲尊法器　自得寂然鉢　心意无忘失

時毘留勒王次復奉鉢佛即受之而爲說偈言

若授如來器　其心未曾忘　四天王安護　乃至清淨覺

時毘留羅叉王次復奉鉢佛尋受之而說偈言

其施清淨器　淨心授如來　身心常輕便　天龍神所歎

時毘沙門王次復奉鉢佛即受之而說偈言

佛戒无缺漏　授完牢之器　信施无乱心　使德无缺減

佛受鉢已累左手中右手按上即合成一令四際現而復歎曰

吾前世施鉢　故有是果報　今獲斯四器　四王神足致

佛歎偈已即以其鉢受賈勢密呪願文〻行を説く大品般若經巻第一奉鉢品より佛告舍利弗若菩薩摩訶薩行般若波羅密能作是功德是時四天王皆大歡喜意念言我等當以四鉢奉上菩薩如前天王奉先佛鉢〻あるを大智度論巻第三十五より釋して云〻四天王奉鉢四鉢義如先説問曰佛一身何以受四鉢答曰四王力等不可偏受一人又令見佛神力合四鉢為一心喜信淨作是念我等從菩薩初生至今成佛所修供養功德不虛文〻行りまで

○是ハ專念寺了恩法橋より問しのぐ抄出〻示さるる

◎　龍の珠〻〻〻更

大平廣記より奇傳を引〻曰〻貞元中周邯買奴善入水如履平地多探水底金銀寶玉弼曰水精訪相州刺史王澤州北八角井旦暮煙雲翳欝漫衍晦夜有光如火相傳金龍潛其底澤曰此當有至寶但無計究之邯乃命水精水精忻然脫衣沈之良久而出曰黃龍鱗如金抱數顆明珠熟寐得一利劒當斬之澤取寶劒與之水精仗劒而入忽見水精自井面躍出續有金手長數百丈爪甲鋒頴自空拏攫水精却入井去節録まる梁四公記より洞庭山洞穴梁武問杰公公曰此穴通枯桑島東岸東海龍王女掌珠藏龍畏蠟愛美玉及空青而嗜燕若遣使可得宝珠於是洛黎縣羅子春請使乃求茅君所遺龍腦香於陶弘景以干闐美玉造二小函宣州空青汰其精者以蠟塗子春身賚燒燕五百枚入洞穴至龍宮獻龍女龍女食之大嘉以大珠三小珠七雜一石報之杰公曰

三珠一是天帝如意珠二珠是驪龍玉七珠是海蚌珠也上者夜光照四十里
中十里下一里節錄とあり是にとれぞ龍玉とある法もあるなりけるを、御行大
納言の此記に心付かざりしはあぢきなしとかけふ吏と秦翁右二書を
抄出しく云ふとしまれ

◎南海

大伴大納言が舟南海に吹着られまして甚く懼れしこそのしは故あ
ることなり　此の文高く書るも菅原梶成の傳 低きは其證にく續後紀の文なり　文徳天皇實錄巻第五に云、
仁壽三年六月辛酉侍醫外従五位下菅原朝臣梶成卒梶成右京人也業練
醫術最解處一作劇 一作瘧 療承和元年従聘唐使渡海朝廷以梶成明達醫經令其
請問疑義

續後紀巻三に仁明天皇承和元年正月庚午任遣唐使以參議從四位上
右大辨兼行相摸守藤原朝臣常嗣爲持節大使從五位下彈正少弼兼行
美作介小野朝臣篁副使判官四人錄事三人となむかくて船を造る三
年五月壬子 五の十四丁 に四船難波を出同年七月二日太宰府を出しけど
も漂廻て破れる船を修理て四年七月癸未 六の十二丁 の奏に三箇の船
出しを又逆風に遇て第一第四の船は壹岐島に第二の船は値賀島に
流着て五年七月甲申 七の九丁 の奏に第二船進發するよし奏しけれども
まだ八月戊子 十丁 遣唐使表到來云々常嗣等言云々臣等捧戴顛倒涯分不次
云々とありて大使の船は進發されぬ由なり一四等の船が吏紀に漏たり
五年春解纜着唐岸

五年春解纜〳〵あるを紀は不合〳〵上は論ふるの如し。承和三年五月
難波を船出し〳〵かゝ〳〵して五年の秋の中まゝ唐岸〳〵に着の給ふ
とけの。當時海路の安の〳〵ぶりし更車持皇子はそ〳〵ぐゆ大伴大納言
の青反吐はひあそびべし

七年夏歸本朝路遭狂飈

六年八月己巳八の十七丁勅太宰太貳從四位上南淵朝臣永河等得今月十
四日飛驛所奏遣唐錄事大神宗雄送太宰府牒狀知大唐三箇船嫌本船
之不完倩駕楚州新羅船九雙傍新羅南以帰朝其第六船宗雄所駕是也
餘八箇船或隱或見前後相失未有到着艱虞之変不可不備宜每方面戍
防人不絶炬火羸貯糧水令後著船共得安穩〳〵癸酉十八丁上奏入唐大使
藤原朝臣常嗣等帰著之由〳〵甲戌勅〳〵得今月十九日奏狀知遣唐大使
藤原朝臣常嗣等率七雙船廻著肥前國松浦郡生屬嶋与先到錄事大神
宗雄船捻是八艘宜依例勞來式寛旅恩〳〵又未到第二船并一雙船復能
覘候來輒奏聞

漂落南海風浪緊急毀船艫俄而雷電霹靂桅子摧破天晝黑暗失路東西須
臾寄著一島不知何島島有賊類傷害數人梶成殊祈願佛神儻得全濟與判
官良岑長松等合力即採集破船杖木造一船共載尓時便風引船得着此岸
七年三月癸丑九の八丁上奏〳〵四月庚申九丁勅〳〵得今月八日飛驛奏狀知遣
唐知乘船事菅原梶成等分駕一雙小船廻着大隅國海畔梶成等漂入異
域万死更生久言苦節誠可矜恤迄于入都依舊勞來量賜布帛以資衣裳

又准判官良岑長松所駕之船全否未期欝陶于懐宜諭戒邊面無絶候伺
若有來着併得安穩〻行り文徳紀ま〻ハ握成長松等合力造一船得着
此岸〻にあるを違〻ふくいこの〻
南海の一島ま漂着て鬪戰ふる〻ハ六月己酉十八遣唐第二船知乗
船事正六位上菅原朝臣握成等海中遇逆風漂着南海賊地相戰之時去承
和六年八月三日より十餘日の間なる〻〻下の文ま〻〻〻所得兵器五尺鉾一枚片蓋鞘横佩一柄、
箭一雙賣來獻之並不似中國兵仗〻〻〻
三代實錄卷十一ま清和天皇貞觀七年十月廿六日雅楽權大允外從
五位下和迩宿祢大田麻呂者右京人也吹笛出身備於伶官始師吏雅
楽權小属外役五位下良枝宿祢清上受學吹笛清上時善吹笛音律調

弄皆窮其妙見大田麻呂有氣骨可勵習因加意而教之承和之初清上
役聘唐使入大唐帰朝之日船遭逆風漂蹈南海賊地為賊殺本姓大
戸首河内國人大田麻呂能受其道〻〻あり其のこ藤原貞敏遣唐准
判官承和二年十月庚寅任ま〻琵琶を傳〻帰らせ〻を六年十月己酉天皇御紫震殿ま〻令貞敏彈比
巴と仰りおもへく清上も笛を傳ま〻て入唐き〻ふ〻ま幸ま〻て此災
ま遇まてしハ惜むべて悲むべて
其時神の御助ありし吏ハ七月己亥九の廿八丁奉授出羽國飽海郡正五位
下勲五等大物忌神從四位下餘如故兼宛神封二戸詔曰天皇我大詔旨
尓坐大物忌大神尓申賜波久須皇朝尓縁有物恠天下詢尓大神為崇賜倍利
加以遣唐使第二船人等迴來申久去年八月尓南賊境尓漂落氐相戰時

彼衆我寡氏力甚不敵奈利儻而克敵留波似有神助止申今依此事氏臆量尓
去年出羽國言上太留大神乃於雲裏氏十日聞作戰聲後尓兵石零利止大神
乃威稜令遠被太留事乎且奉驚異且奉歡喜故以從四位爵乎奉授兩戸之
封奉宛良久乎申賜波久申以の上曼字脫の乎ハ止の誤なり出羽國より言上し事ハ六年
十月乙丑ハの廿五丁出羽國言去八月廿九日管田川郡司解偁此郡西隣陸
府之程五十餘里本自無石而從八月三日霖雨無止雷電鬪聲經十餘日
乃見晴天時向海畔自然隕石其數不少或似鏃或似鉾或白或黑或青赤
凡厥壯體銳皆向西莖則向東詢于故老所未曾見國司商量此濱沙地而
徑寸之石自古無有仍上言者其所進上兵家之石數十枚收之外記局勅
曰陸奥出羽并太宰府等若有機變隨宜行之且以上言克制權変令凞不

虞又轉禍爲福佛神曼先宜修法奉幣と見えたり詔詞ハ十の下餘字を脫とり
此靈異今世まで猶遺て不絶例なりとぞ。其ハ近江國山田里木内重
曉の著せる雲根志と云書ハ記しるして或人の語りるやう。和泉
國なる旭峯法師の云く出羽國ハ神軍と云吏なりて毎年月日ハ不定の聞漏
しゃせいの鏃石をふる〳〵鳥海山の麓神の森ハ邊なる矢島と云濱なり其始
西北の海面當時ハ南海なるハ今西北方なるハ不審し松前の方に當て三四丈許ハ十五
六丈ばかりの綿を積ふるごの如き白雲海中より涌出て五七日も不動
ふるてうに曼毎年の例まで此雲之あるバ即津輕侯ハ告まをすとぞ
頭十人歩人五百人を賜てて十手ハ分きて常ハ弓ハ青竹の箭を
多く矧貯置て彼濱ハ到て十組ハ備を立てそこの〳〵なく海の方

に彼白雲を差て射放ことなり斯く雷なり地震やら雨風をはげしく御社の内も甚く震動て濱邊ハ沙を吹まくて目口開べくもあらぬを念じてひたひら射放つ態をする事晝夜をいはず津軽城へも七里餘も隔りけれど其響なほとよみわたりけれど斯て二三日ありして晴そしハ五七日も不止事あり漸く雨風をさまり空霽わたりて常の狀になりけれバ皆退きけるを其跡に彼鏃石多く隕ふるを身の守にとて拾ひとりけり此濱一里餘に廣さハ三里餘の地まで草木も小石もなく甚白く米粉の如き細砂のみなり其御神ハ大物忌大神と申すなりと此法師ハ出羽人にて其事よく知て語ぬるを（當時とてあれど今ハ南海賊地に落て苦しむ人も无りけれハ不用なる神軍のやうにハあれど猶此神御稜威を示して外國の賊を防ぐ神諚などおもひまして如斯）世に奇しく妙なる神事を今に行ひけるにこそ有らめ　誠に霊異しき事なれど梶成主の傳へ因に委まるしつ

此神社ハ神名式に出羽國飽海郡大物忌神社（名神大）小物忌神社とあり貞観四年十一月乙丑朔詔出羽國正四位上勲五等大物忌神預官社とみえて猶増位のこと正史に載られたり

朝廷嘉其誠節十年為鍼博士次為侍醫卒於官とみえたるを此事を語傳へたれどこの人南海を甚もく恐懼しし地と思居つるなりけるを．

◎男きさりし人

書紀巻第七に大足彦忍代別（景行）天皇四年春二月甲寅朔甲子天皇幸美濃左右奏言之茲國有佳人曰弟媛容姿端正八坂入彦皇子之女也天皇欲得

爲妃幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕則隱竹林、於是天皇權令弟媛至而居于泳宮、鯉魚浮池朝夕臨視而戲遊時弟媛欲見其鯉魚遊而密來臨池、天皇則留而通之、爰弟媛以爲夫婦之道古今違則也、然於吾而不便、則請天皇曰、妾性不欲交接之道、今不勝皇命之威、暫納帷幕之中、然意所不快、亦形姿羸陋、久之不堪陪於掖庭、唯有妾姊名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔、宜納後宮、天皇聽之、

○弟媛一度ハ辭ミ給ひしかど姉君ヲ讓リ給ヘ再度御婚ありけり源氏物語の宇治宮ハ御女子ハ此と摸寫して御姉妹互ヲ取替ふるものなり猶此一段の叟ハ千村仲雄主の泳宮考ヲ委說ありしを見べし

三代實錄卷第三ヲ清和天皇貞觀元年八月十日尚侍從三位當麻真人浦虫薨時年八十浦虫者右京人也父正六位上繼麻呂云〻浦虫爲人貞和早標美譽未嘗適於人遂不知伉儷之道自掌宮人之職脩禁內之禮式

大和物語百卅八段に故御息所の御姉おはしけるを子ヲ思ひ給ふなん甚ちらし〻歌よこ給ふ叟も弟人ゑち御息所よりも勝てなまいとゞこの世なる若き時ヲ女親ハ云給ひよりと繼母乃手ヲ在りけるで心ヲ物ヲ不叶ぬ時も有りさてよみ給ふ

在さてぬいのちまつ間の程だこの憂事ちぐ〻なげうべもかゞ邪となまよこ給ふ

梅花を折〻又

かゝふ香ヲ秋もかゝるべるひさぐ春戀してふ物どもをもしやと

讀給ふりけふ甚よしばまくをの〻在のりけるぞよばよ人も甚多の

又ハ後ど返事もせざりけり女と云も終はかゝるを見よべきなり
何〳〵ぞ時〳〵ハ返事さるゝを親も繼母も云けるバせめて後てかくな
ぜ云やりける
扨もゝ〳〵かゝなるべき忍ばぬ人なるや人のこゝろ
ぞこのゝ云やり〳〵物も不云りかく云ふ心ぞ人を親など男婚をむせ
云ふ後ど一生に男をでやこなんと云こゝ後よゝぶもよ云けるさいひ
けるもさるゝ男もせで廿九ゝ〳〵おまうせるひる
○此御息所誰〳〵も知ざ後バ其御姉ちゝ考べきよしなし
◎ 月はこやこ
起世經ゝいゝ〳〵佛告比丘月天子宮殿縱横正等四十九申旬四面垣墻七

寶所成月天宮殿純以天銀天青瑠璃而相間錯二分天銀清淨無垢光甚明
曜餘一分天青瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照亦爲五風攝持而行亦云
於此月殿亦有大輦青瑠璃成輦高十六申旬廣八申旬月天子身與諸天女
住此輦中以天種〳〵五欲功德和合受樂隨意而行月天子身壽五百歲子孫
相承皆於彼治云〳〵
龍城錄ゝ云〳〵開元六年上與申天師道士鴻都客八月望日夜因天師作術
三人同在雲上遊月中過一太門在玉光中飛浮宮殿往來無定寒氣逼人露
濡衣袖皆濕頃見一大宮府榜曰廣寒清虛之府其守門兵衛甚嚴白刃粲然望
之如凝雪時三人皆止其下不得入天師引上皇起躍身如在烟霧中下視玉
城崔嵬但聞清香藹鬱下若萬里瑠璃之田其間見有仙人道士乘雲駕鶴往

來若遊戯少焉步向前覺琴色冷光相射目眩極寒不可進下見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂音嘈雜亦甚清麗上皇素解音律熟覽而意已傳頃天師亟欲帰三人下若旋風忽悟若醉夢中迴亦次夜上皇欲再求往天師但笑謝而不允上皇因想素娥風中飛舞袖被編律成音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗無復加於是矣

◎ 天の羽衣

坂士佛の康永元年大神宮參詣記ゑ外宮御鎮座ゑ事を記〻〻次ゑ右一首奉讃外宮天照豊大神歌也と左ゑ記せる長歌あり〻次ゑ豊の下受字をもちきり

反歌 一本短歌〻〻

處女子之友亦別而、天原、振蘿津久流、昔悲聞、第四句誤字有べし一首の意解之べ

右一首奉題豊宇賀能賣神歌也

むかし丹波國ある川邊ゑ天女八人降〻水を浴〻遊ぶり一人の老翁是を見〻數多の天女ゑ中に一人衣を取かくし天女是ゑ騒〻皆飛去ぬ衣ゑ陰さ隠るる天女歎〻衣をこふ翁ゑ云〻我ゑ子なし願ハ此國ゑ留〻我子ゑ成ゑ〻〻〻更ゑ衣を返さじ天女力及〻で翁ゑ子となりぬ養父ゑ家ゑ貧〻き事を隣〻〻酒を造〻賣ゑ此酒を一椀を服せバ百病悉痊是ゑ依〻諸乃宝を馬車に積て送る程ゑ富貴ゑ家と成ゑけり其後翁天女を厭心ゑ向ひ〻其意を問ふ程ゑ翁隠さなく申けゑで天女是を恨〻天上ゑ昇らむ〻ゑで天の羽衣ゑ別〻飛行の德を失なひ下界ゑ住すと丈ゑバ養育の翁ゑ厭まて起居ゑ處なし常に蒼天

を仰ぐも伴なひし處女を見えず泣く白屋に臥るも憐む人稀なり昔を
恐ひ今を悲しく讀まひくふ

天原振離見者霞多地家路麻余伊呂行散不知聞（迷の伊字假字格多ゴノ）

此天女ゑ神明御迁座の時御供申て丹波國より當國へ遷ゆ天女ゑ
泣居くる列を奈久郡云くくにるも

○此記凡く古代をたつぶ古書に違つふ更多し此故事外宮儀式帳
よも不所見こゝに本ハ何の書に出るのたつぶ次に引る搜神記
に甚能似くる更なり

搜神記に豫章新喩縣男子見田中有六七女皆衣毛衣不知是鳥人匍匐往
得一女列其解毛衣取藏之即往就諸鳥諸鳥各飛去一鳥獨不得去男子取
以為婦生三女其母後使女問父知衣在積稻下得之衣而飛去後復以迎三
女女亦飛去抄

◎ 天に升る

靈異記上卷第十三條に大和國宇太郡淳部里有風流女是即彼部内淳部造麻呂
之妾也天年風聲為行自性塩醤存心七子産生極窮无食无便為衣綴藤日
日沐浴潔身著綴毎於野採菜為事常住於家淨家為心採調盛唱子端坐含
咲馴言致食常以豆行為身心業彼氣調恰如天上客豆難波長柄豊前宮時
甲寅年其風流事神仙感應春野採菜食於仙草而飛於天誠知不修佛法而
好風流仙藥感應如精進女問經云居住俗家端心掃庭得五功德者其斯謂
之矣

○上ゴ引ける藤原史公の遊吉野と云る詩ゴ漆姫控鶴擧と云るハ
此故更なるべし此傳ゴハ崔の更なるゴ彼詩を考ゴハ崔ゴ乗て
天ゴ昇し傳ゴ有けるゴし○猶加茂大神ゴハ搜神記の鳥女なるゴも
ゆゑ合ひべし

◎ 今昔物語ゴ載る此物語幷諸書ゴ異説

今ハ昔。。天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要ズル人
ニアタヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ランガタメニ篁ニユ
キ竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光アリ其竹ノ中ニ三寸バカリナル人ア
リ翁是ヲ見テ思ハク我年來竹取ツルニ今カヽル物ヲ見付タルヿヲヨ
ロコビテ片手ニハ其小人ヲ取片手ニハ竹ヲ荷ウテ家ニ帰テ妻ノ嫗ニ

篁ノ中ニテ此女子ヲコソ見付タレト云ケレバ嫗モ悦テ初ハ籠ニ入テ
養ケルニ三月バカリヤシナヒケリ例ノ人ニナリヌ其子ヤウ〳〵長大ス
ルマヽニ世ニナラビナク端正ニシテ此世ノ人トモ覺ザリケレハ翁嫗
イヨ〳〵是ヲカナシミ愛シテ傅ケル間ニ此世ニ聞エタカク成ニケリ而
間翁亦竹ヲ取ランガ為ニ篁ニ行ヌ竹ヲ取ニ其度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付
タリ翁コレヲ取テ家ニ帰ヌ然レバ翁忽ニ豊ニ成ヌ居所ニ宮殿樓閣ヲ
造テ其レニ住ミ種〳〵ノ財庫舍ニ充チ満テリ眷屬衆多ニ成ヌ亦此兒ヲ
儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思様ナリ然レバ弥ヨ愛シ傅ク〻无限シ而ル
間其時ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞ケレバ皆
心ヲ盡シテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將來レ其時ニ會ハ

ムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有ケリ其レヲ取テ持来レ然ラム時ニ
會ハムト云ケリ後ニハ不打ヌニ鳴ル鼓ト云物アリ其レヲ取テ得サセ
タラン折ニ自ラ聞エムナド云ウテ不會ザリケレバ假借スル人〻女ノ
狀形ノ世ニ不似微妙ナリケルニ躭テ只此ク云ニ隨テ難堪キ事ナレド
モ旧ク物知タル人等ニ可求キ夷ヲ問ヒ聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ行或
ハ世ヲ捨テ山ノ中ニ入リ此様ニシテ求ケル程ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不
返來ヌ輩モ有ケリ而ル間天皇此女ノ有様ヲ聞シ食シテ此女世ニ並無
ク微妙シト聞我レ行テ見テ実ニ端正ノ姿ナラバ速ニ后トセムト思シ
テ忽ニ太臣百官ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸アリケリ既ニ御マシ着タル
ニ家ノ有様微妙ナル〻王ノ宮ニ不異ズ女ヲ召出ルニ即參レリ天皇此

レヲ見給ニ実ニ世ニ可譬者無ク微妙ナリケレバ此我ガ后ト成ラムト
テ人ニハ不近付ザリケルナメリト喜ク思シ食テヤガテ具シテ宮ニ返
テ后ニ立テムト宣フニ女申サク我レ后トナラムニ無限キ喜ビ也トイ
ヘドモ実ニハ已人ニハ非ヌ身ニテ候也ト天皇宣ク汝チ然ラバ何者ゾ鬼
カ神カト女ノ云ク已鬼ニモアラズ神ニモ非ズ但シ已ヲハ只今空ヨリ
人来テ可迎キ也天皇速ニ返ラセ給ヒ子ト天皇此レヲ聞給テ此ハ何ニ
云事ニカ有ラム只今空ヨリ人来テ可迎ニ非ズ此レハ只我ガ云夷ヲ辞
ビムトテ云ナメリト思給ケル程ニ暫許有テ空ヨリ多ノ人来テ輿ヲ持
来テ此女ヲ乗セテ空ニ昇ニケリ其迎ニ来レル人ノ姿此世ノ人ニ不似
リケリ其時ニ天皇実ニ此女ハ只人ニハ無キ者ニコソ有ケレト思シテ

宮ニ返リ給ニケリ其後ハ天皇彼女ヲ見給ケルニ実ニ世ニ不似形有様微妙ナリケレバ常ニ思シ出テ破無ク思シケレドモ更ニ甲斐無クテ止ニケリ其女遂ニ何者ト知ル事無シ亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケム惣テ不心得ヌ事也トナム世ノ人思ケル此ル希有ノ事ナレバ此ク語リ傳タルト也

○右の物語大ヽ同さまなる異なる處すくなし　此書いまゝ元本を不見抄ヨ引ハ假字多く続ける処なりハ改もしつ　○女始ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ将来レ云ハ霊異記上巻第一條ヨ小子部栖輕者泊瀬朝倉宮廿三年治天下雄略天皇謂大泊瀬稚武天皇之隨身肺脯侍者矣天皇磐余宮之時天皇與后寐大安殿婚合之時栖輕不知而参入也天皇耻輟當於時而空雷鳴即天皇勅栖輕而詔汝鳴雷奉請之耶荅曰将請天皇詔曰尓汝奉請栖輕奉勅從宮罷出緋襲着額鞏赤幡桙乗馬從阿部山田之道与豊浦寺之路辻往至于輕諸越之衢躡請言天鳴雷神天皇奉請呼云云然而自此還馬辻言雖雷神而何所不聞天皇之請耶辻罷時豊浦寺与飯岡間鳴雷落在栖輕見之即呼神司人入轝籠而持向於大宮奏天皇言雷神奉請時雷放光明炫天皇見之恐偉進幣帛令還落處其落處今呼雷岡在古京小治田宮者然後栖輕卒也天皇勅留七日七夜詠彼忠信雷落同處作彼墓収立碑文柱言取雷栖輕之墓也此雷思念而鳴落踊踐於碑文柱彼之折間雷搏所捕天皇聞之放雷不死慌七日七夜留在天皇勅使樹碑文柱標言生之死之捕雷栖輕之墓謂古京時名為雷岡語本昔也〻なり

此叟雄畧紀ニハ七年秋七月丙子天皇詔少子部連蟈蠃曰朕欲見三諸岳神之形汝膂力過人自行捉來蟈蠃荅曰試往捉之乃登三諸岳捉取大蛇奉示天皇天皇不齋戒暫見之其雷虺虺目精赫赫天皇畏蔽目不見却入殿中使放於岳仍改賜名爲雷暫見之の三字畧記ハ從ニ補

とゝくゝふり○優曇華ハ叟ハ玉枝の段ハいひき○不打ヌニ鳴ル鼓

ト云物ハ法花經妙音菩薩品ハ百千天樂不鼓自鳴ハ觀无量寿經六觀ハ

有无量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空如天宝幢不鼓自鳴

詞林採葉抄ニハいとゝ古老傳曰此山麓垂馬里有老翁愛鷹孃飼犬後作箕爲業竹節間得少女容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御宇延暦之比諸國下宣旨被撰美女坂上田邑麻呂爲東國勅使富山裾老翁宅宿終夜不絶火光問子細是養女光明也云田邑麻呂即上洛奏叟之由於是少女登般若山入巖崛畢帝幸老翁宅翁奏由緒帝悲泣脫帝玉冠留此處登頂上臨金崛少女出向微笑曰願帝留此帝即入崛訖玉冠成石在干今彼翁者愛鷹明神也孃者飼犬明神也已上今考之云當山縁起之上者仰雖可信用之時代甚不審也疑若天智天皇欲彼帝近江宮ニテ崩玉フトイヘ𪜈実ハ不然白地ニ御馬ニ召テ出マシテ隱玉フ所ヲシラズ宇治山ノ麓ニ御鞋片落コレヲ取テ山陵ニ籠タテマツル鞋石トテ長三尺許有之富士金崛ヘ入玉フハ此帝欣可詳鴨長明巡歷記云取要此山ノ傍ニ採竹翁ト云者アリ宅後ノ竹林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハラヲテラス百媚アリ見人斷腸聞者心ヲ動ス是ヨリシテ青竹ノ中ニ黄金出

来テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭光雲客重光
艶言ヲツクリ戀懷ヲ抽ヅ時ノ帝叡聞ニオヨビテ御狩遊ノ由ニテ姫ノ
竹亭ヘ幸アリテ鶯ノ契ヲムスビ松ノ齡ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申
ケレハ帝空ク返玉フカタヘノ天昊ヲシリテ飛車ヲ出シテ迎テ天ニ昇
リヌ鶯姫帝ノ御契ノサスガニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テケリ其
歌ニ云

今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイデヌル

帝御返歌

逢コトノ泪ニウカブ我身ニハシナヌ藥モナニヽカハセン

勅使智計ヲメグラシテ富士ノ嶺ニ登テ此藥ヲ燒アゲヽリト仍テ此山
ヲ不死山トヽ云ケルヲ郡ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ已上〻有〻

○古老傳の説ゑ此山と云ハ富士山なり是ハ此物語を附會して
桓武天皇ゑ御叟と申なるべし○今考之と云ハ詞林採葉の説
なるべし疑若天智天皇歟と云るもひがごとなる叟云も更なり富
士の金崛ゑ入給ふハ此帝歟と云るも由なき叟なり此天皇の崩御
し時の叟書紀ゑ〻万葉集なる歌ゑも見えて明なるをや○鴨長明
ご巡歴記の説ハ此物語を片端ひがごとさ傳ふるを聞るなるべし
大秀按ゑ此物語ひろ〻ハ此書を不見し〻暗記ゑ〻語傳る區くに
なるべきのみ已いと幼ゑし時山深き地より出ふる老人ご今昔
物語なる説ゑ談ふるを髣髴ゑ此老人ハ一文不通ゑ者ゑて古

く聞傳へるを談ける中ゝ宇治拾遺なる鬼ゝ瘤〻〻〻〻るもみな
又雀の子やしなひ〻〻徳得しハ今も女童の語まるを聞つ長明も此
本ハ未見で談傳へるを聞つふのことなるべし
國名風土記ゝいと〻〻甲斐國トハ昔ハ富士山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ
種テアキナヒケル者アリ彼翁園生ノ竹林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖
メ置ク其後程ヲヘテ豆ヲミレバ容顔優ナル寵姫ト成ケリ然ルニ彼ヲ
養子トスタケシ後ニカノ翁ガ田作ケル時ニ暇ナカリシカバ養母ノ訟
ヘテイハク隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助トナリ玉ハザルト情ナク云
ケレバ鶯姫コレニ怒ヲナシテ富士山ノ峯ニ登テ岩ヲ蹴破テ湯ヲ吏ラ
カシ田ツクル人ノ所ミナ燒石トナル件ノ祖父母ハニゲテ白根ガ峯へ

ユキ又彼田カケル馬モニゲテ信州駒ガミ子ニスミケル其駒主ヲワス
レズ常ニ馴シカバ彼馬ヲ心ニ入テ飼シユヱナリ此所ヲ飼國ト云然ヲ
カナガキニ甲斐トカクナリ黒駒ト云モ甲斐國ヨリイヅルナリ
○こゝに國名風土記と云ふハ大ふ〻〻〻なる妄説まく取まも
〻〻ぬ物なり文亀年中ゝ姉小路基綱中納言の書ける物ゝ此記
の飛騨國の条を引ゝ〻ハ其よりハ古き文なり
此説ハ古老傳をと〻〻〻偽をしるの歌
◎ 不死藥
本草和名第十六巻ゝ
不死藥廿一種 黄玉芝黄蓋三重 海中紫菜欵生石上 人威芝如人赤色 天精芝
青芝玉葉 伏苓芝狀如牛角 牛精芝青芝青莖 不死芝青蓋四支 銅芝蓋如甑色黄赤

海石榴油 在海嶋中似安石榴　赤松芝 狀如人色赤　金神芝 白蓋黑茎　夏精芝 方蓋三子

石決明 附石生海中　黑土芝 黑玉蓋五重茎　木精芝 赤光青蓋　白玉芝 白蓋白茎

科玄丹芝 赤玉文黃蓋　火蓋芝 赤蓋黑茎　烏父芝 赤蓋玉茎　銀末 生大隈土之莫

神芝 黃蓋黑裏茹瓦是等日月所光処無不生但人所不審耳已上廿一名出崔禹

○猶不死藥の叀本文ハ註ニ見えたり

文政十一年歳次戊子三月功畢

田中大秀著併書

山崎弘泰

長瀨俊香　同校

竹取翁物語解卷首